論文内容の要旨

共生人間学　　専攻　　氏名　浅野直樹

現代若者については、「フリーター」、「ニート」、「おたく」といった言葉とともに、様々なことが語られている。本論文ではそれらの概念を、背後の状況も含めて注意深く検討し、現代若者に関する一つの特徴を取り出す。その特徴とは、何でも自己決定できる「強い主体」の想定と、そこに収まりきらない現象の噴出である。というのも、精神分析理論が示すように、実際には「強い主体」で全てを覆い尽くすことはできないのである。

具体的には、現代若者の生活を、職業生活と愛情生活に分けて考える。職業生活では、制度上の問題が大きいにもかかわらず、「フリーター」や「ニート」の人たちは自ら進んでそのような状態にあるとされ、それゆえ自己責任に帰着されがちであることを暴く。愛情生活でも同様に考える。「おたく」には、恋愛ができないから「おたく」になるという側面があるのだが、そのことは無視されることが多い。「親密性パラダイム」という語で示されるように、現代若者の愛情生活では親密性が行動の基準とされ、親密性が獲得できないことは本人の努力不足に帰される。両方の生活において、努力すれば成功するという「強い主体」のモデルが想定されているのである。

「強い主体」の想定は現代若者の間でのみ問題となっているわけではない。自己決定をめぐってはいくつかの問題が指摘されているが、それは「強い主体」を想定していることによる。人間は独立した「強い主体」ではなく、他者性が埋め込まれた主体であると考えればこれらの問題は解決する。

精神分析はこうした主体のあり方を詳細に論じている。それによると、人間主体には小文字の他者と大文字の他者という二種類の他者が深く関わっているのである。その中でも大文字の他者との関係性が現代では変化し、大文字の他者が見えづらくなっているのではないかと結論づける。

精神分析の主体概念から見る現代若者の様相

――「フリーター」、「ニート」、「おたく」をめぐって――

京都大学大学院　人間・環境学研究科　共生人間学専攻　浅野直樹

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第１部　現代若者の様相・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　第１章　職業生活・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第１節　「フリーター」・「ニート」　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　　第２節　社会的な問題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　　第１項　仕方のなさそうな問題――失業・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　　　第２項　自由化――非正規雇用の増大、学校経由の就職の衰退・・・・・・・・・9
　　第３節　当事者の心理的な問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
　　第４節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
　第２章　愛情生活　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　第１節　「おたく」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　　第１項　定義・歴史　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
　　　第２項　本田透の事例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
　　　第３項　特徴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
　　第２節　社会的な問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
　　　第１項　仕方のなさそうな問題――愛されないこと　・・・・・・・・・・・・21
　　　第２項　自由化――「親密性パラダイム」・・・・・・・・・・・・・・・・・23
　　第３節　当事者の心理的な問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
　　第４節　まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第２部　「強い主体」をめぐる考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
　第３章　自己決定をめぐる諸問題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　第４章　精神分析理論における主体と他者　・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　第１節　フロイト　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　　第１項　統一的な「強い主体」の否定　・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　　　第２項　小文字の他者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
　　　第３項　大文字の他者　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

第2節　ラカン ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第1項　統一的な「強い主体」の否定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
第2項　小文字の他者 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第3項　大文字の他者 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
第3節　大文字の他者との関係の変化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44

おわりに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

凡例

- 文中の脚注は、文章の右肩にアラビア数字をつけ、ページ末に記した。
- 引用及び参考文献の形式は、日本社会学会編集委員会による『社会学評論スタイルガイド』（http://wwwsoc.nii.ac.jp/jss/jsr/JSRstyle.html）に従った。
- 引用文中の［］（大カッコ）内は筆者による。

はじめに

現代若者については様々なことが語られており、「フリーター」、「ニート」、「おたく」といった新奇なキーワードが生み出されている。あまりに多くのことが語られ、混乱を覚えるほどである。その一例を挙げると、2007 年元日より、朝日新聞紙上で「ロスト・ジェネレーション」と題した特集が組まれており、そこでは若者の生活がいろいろな側面から描かれているが、まとまった見解は示されていない[1]。本論文では、現代若者についての一つのまとまった特徴を描き出すことを目指す。

ここで本論文で扱う対象を明確にしておく。場所については、日本に限定して話を進める。とはいえ本論文での議論が他の地域と全く関係がないわけではないだろう。時代については、「現代」の目安を示しておく。本論でも触れるが、バブルの崩壊や、冷戦構造の解体が時代の転換点となっているので、およそ 1990 年以降を現代とする。「現代若者」はその時代に、職業や愛情に関して大きな決定をするであろう若者であった人たちのことであるので、若者の上限を 30 歳と仮に決めるなら、現代若者の上限は、2007 年現在で 47 歳までの人となる。下限は特に定めない。これはかなり広くとった場合であり、現代若者の中心は、25～35 歳くらいである。先に挙げた朝日新聞での「ロストジェネレーション」はこの 25～35 歳の世代を指している。もちろん、この基準はあくまでも目安である。

また、本論文では単に「若者」としたが、主に男性を想定している。ジェンダーの視点を取り入れるべきではあるが、筆者の手には負いきれず、今後の課題とする。

現代社会がどれほど複雑になってきているように見えようとも、人々がそこで生活していることを思い起こすなら、人間の営みはそれほど大きくは変化していないことに気づくだろう。おそらくいつの時代であっても職業生活と愛情生活が人生における重大な問題であることに変わりはない。とりわけ若者の間ではそうである。先ほど挙げたキーワードもそれら二つの領域に関わっている。

第 1 部では職業生活と愛情生活とに二分して、現代若者の様相について論じる。

職業生活を論じる第 1 章では、「フリーター」や「ニート」といった新しい言葉の定義を

---

[1] ここでの「ロストジェネレーション」は、25～35 歳を指している。特集の各日の見出しは次の通り。

- さまよう２０００万人（『朝日新聞』2007.1.1 朝刊）
- 世直し世代　地方議員めざす（『朝日新聞』2007.1.3 朝刊）
- 仮面世代　就職難の果て…（『朝日新聞』2007.1.4 朝刊）
- 自分探し世代　終わりなき異国の旅（『朝日新聞』2007.1.5 朝刊）
- 消耗世代　何も残らない（『朝日新聞』2007.1.6 朝刊）
- 起業世代　ネット黎明期（『朝日新聞』2007.1.7 朝刊）
- 難婚世代　合わないなら 1 人で（『朝日新聞』2007.1.8 朝刊）
- 愛国世代　信頼できぬ会社・政治（『朝日新聞』2007.1.9 朝刊）
- 脱レール世代　自分試しへ（『朝日新聞』2007.1.10 朝刊）
- まじめ世代　気づけば、うつ（『朝日新聞』2007.1.11 朝刊）
- 創造世代　権威に背向け僕らの生き方（『朝日新聞』2007.1.12 朝刊）

確認する作業を通して、制度上仕方のない失業がいまだ大きな問題であることを確認する。それにもかかわらず若者の意識の変化によって全てを説明しようとする言説が根強い。それは各種の自由化によって努力の可能性が広がったためだと推測できる。

愛情生活を論じる第 2 章は「おたく」から話を進める。「おたく」の既存の定義は本論で確認するが、本論文では「おたく」を「虚構のキャラクターを愛する人々」と定義する。「萌え」という言葉を最近よく耳にするようになり、その言葉については日本文化の現れであるなど言われたりするが、単純に虚構のキャラクターへの愛情を表しているのではないだろうか。「おたく」をこのように定義すると、そこからこぼれ落ちるものが多々あるだろう。しかし、現代の「おたく」と呼ばれる人々にとって、この「虚構のキャラクターを愛する」という側面は非常に大きいと思われる。このように「おたく」を定義すると、その特徴は一般に「おたく」とされる人たちだけに関係するのではなく、多くの人にも関わる。というのも、実在の人物を愛する際も、一人でその人のことを思い浮かべている姿を想像すればわかるように、「虚構のキャラクターを愛する」という側面があるからである。こうした側面は、本論文での定義に従い、「おたく」的であると言える。

「おたく」たちの虚構のキャラクターへの愛情は、現実世界における愛情生活での不具合を補うものではないだろうか。というのも、現代では、当人同士の同意があれば何をしてもよいという「親密性パラダイム」が極めて優勢になってきているからである。逆に言うと、相手の同意を獲得できないと何もできない。しかし、社会制度で恋愛が妨げられているわけではなく、努力の余地があるので、恋愛ができないということは本人の責任にされがちなのである。

つまり、現代若者は、あらゆる可能性に開かれているがために絶えざる努力が要請され、うまくいかない場合は当人の自己責任ということにされるという状態にあるのである。別の言い方をすると、あらゆる可能性を実現し、自己決定をできるような「強い主体」が想定されているのである。

ここで「強い主体」について説明しておこう。金子勝は「強い個人」について次のように述べている。

> 「強い」あるいは「弱い」という概念は、個人の性格を表しているのではない。もちろん、よく使用される社会的強者か弱者かという分類でもない。理論の出発点として仮定される人間像に、どれだけ高い負荷がかけられているか否かという意味である。「高い負荷をかける」とは、現実の人間の行為として、持続的に取ることのできない現実離れした仮定を置くということだ。つまり高い負荷に耐えられる人間を「強い個人」、そうでない人間を「弱い個人」と考えるのである。（金子 1999: 1-2）

金子はそのうえで、経済学の新古典派理論が前提としている、利益を合理的に計算でき、他人に関わりなく自己利益の最大化を追求できるという人間像は、「強い個人の仮定」であ

るとしている（金子 1999: 12）。本論文での「強い主体」という概念は、金子の言う「強い個人」とほぼ同義である。ただし、金子は「強い個人」に「弱い個人」を対置させ、あくまでも他者から区別された個人という枠組みを維持するのに対し、本論文では「個人」という用語を採用せずに、そもそも「主体」には他者性が深く刻み込まれていると主張する。

第 2 部ではこの「強い主体」をめぐる議論を展開し、そのようなものは存在しないと主張する。

第 3 章では、対象を現代若者に限らずに、自己決定にまつわる事柄を考察する。自己決定にまつわる問題は医療や生殖の分野でしばしば語られるのだが、そこでは「強い主体」の想定が生み出す問題が先鋭化している。人間は「強い主体」ではなく、本来的に他者性が深く関わっていると考えればそれらの問題は解決する。

ここまでは社会学的な議論であった。第 4 章では、人間主体にいかに他者性が入り込んでいるかを精神分析の観点から論じる。精神分析が誕生するきっかけとなった神経症患者は、当時すでに支配的であった「強い主体」という想定の反証であると考えることができる。その神経症の治療から出発し、無意識の概念を一般化してゆく精神分析は、そもそも「強い主体」という前提に反対していたのではないだろうか。精神分析の創始者であるジークムント・フロイト（Sigmund Freud）、及び彼の理論を発展させたジャック・マリー・ラカン（Jacques Marie Lacan）の双方とも、「強い主体」を否定している。主体には他者性が深く入り込んでいるのである。ラカンの用語を使ってもう少し詳しく言うなら、小文字と大文字の二種類の他者が関わっている。その二種類の他者を、精神分析理論における、欲求、要求、欲望、欲動との関連で論じる。

最後に結論として、現代では、大文字の他者が見えづらくなっているのではないかという仮説を提起する。大文字の他者が見えづらくなっているために、「強い主体」の想定が広がっていると説明できる。しかし、それでも大文字の他者は消えてしまうことはないのである。大文字の他者などとは関わらない「強い主体」の想定と、それでも大文字の他者が存在するという実情との間で、「フリーター」、「ニート」、「おたく」といった現象が出現しているのではないだろうか。

第１部　現代若者の様相

この第１部では現代若者の様相を探る。そこには現代の特徴が見られるだろう。「フリーター」、「ニート」、「おたく」といったキーワードから出発するが、現象の単なる記述にとどまらず、現代若者が直面している共通の問題を取り出すことを試みる。やはり若者にとっては、職業生活と愛情生活とが大きな位置を占めており、「フリーター」、「ニート」は職業生活に、「おたく」は愛情生活において、何らかの問題を投げかけている[2]。これらは新しい現象ではあるが、注意深く検討すると、いつの時代にも共通するような問題に通じている。

職業生活では失業、愛情生活では愛されないこと、これら二つのことは、現代に限らず、広く見られる仕方のなさそうな問題である。しかし現代では、こうした問題が正面から論じられることは少ないように思われる。「フリーター」、「ニート」、「おたく」が語られる際も、彼らの新奇な特徴が強調され、こうした問題にはなかなかたどり着かない。現代では職業生活や愛情生活において、科学技術の発展や制度の自由化により、外的な制約が少なくなってきているために、あらゆることが本人の内面に帰着させられがちなのである。

こうして、現代若者は、個人に強い負荷がかけられている。多くのことが本人次第だとされるのである。しかし実際には本人だけではどうしようのないことも多い。現代若者は、何でもできるはずの自分と、そうはできない自分とに引き裂かれているのである。

---

[2] 「おたく」と愛情生活との関わりについては意外に思われるかもしれない。このことは本論の第２章の第１節で詳しく述べる。

また、「フリーター」・「ニート」と「おたく」とが、重なることがあるにしても、直接つながるわけではない。「ニート」でかつ「おたく」ではない人もいるし、「フリーター」でも「ニート」でもなく（つまり正規雇用で働いており）かつ「おたく」である人もいる。とはいえ、恋愛をあきらめている若者を指す「恋愛ニート」という言葉があるように、職業生活と愛情生活とに共通する構造があるのかもしれない。

第 1 章　職業生活

現代若者論の文脈で「フリーター」や「ニート」に盛んに言及されることからもわかるように、現代の若者を語る際には就業問題に触れないわけにはいかない。青年時代は一般に、職業を選択する時期とされているからである。まず「フリーター」、「ニート」という言葉の定義と歴史的経緯、統計情報を整理する。その上で現代若者が直面している、職業に関する社会的な問題を論じ、当人の心理的な問題を考える。

第 1 節　「フリーター」・「ニート」

まず「フリーター」という言葉から始めよう。小杉礼子によれば、この言葉は 1980 年代後半に作られ、何らかの夢や目標を実現するためなどの理由であえて正社員にならずにアルバイトをする人を指していた（小杉 2003: 1）。確かに当時はバブル景気真っ只中で正社員になりやすく、それでもアルバイトをする人たちの多くは自ら進んでそのような道を選んだのだろう。

しかし、バブル崩壊に伴い雇用環境が劇的に悪化した後も「フリーター」という言葉は広まった。現在でも「フリーター」といえば「適当にアルバイトをしながら好きなことをしているお気楽な人たち」といったイメージが根強い。

ようやく 2000 年あたりから、小杉により、「フリーター」を「モラトリアム型」、「夢追求型」、「やむを得ず型」と分類することが始められた（小杉 2003: 13）。それでも当人の言をそのまま信じて分類がされており、本来は「やむを得ず型」に分類されるような人が、「モラトリアム型」や、とってつけたような夢を持ち出して「夢追求型」に含まれている可能性がある。「夢追求型」での夢はミュージシャンになることなど、しばしば過大に見える夢であるのはそのためかもしれない。「夢追い型」と「やむを得ず型」とを完全に区別することはできなく、論理的には逆に「夢追い型」と分類すべきところを「やむを得ず型」と分類している可能性もある。しかしその数は圧倒的に少ないと思われる。本人も過大な夢だと認識しつつそれを追求しているのだろう。というのも、夢を追求していると掲げると周りからの評判もよくなるのである。小杉はそのことを示す、次のようなインタビューを載せている。「私のような、何かするためにフリーターをしているというのは周りにはあまりいないかもしれない。最近よく「すごい、夢のために頑張ってて偉いよね」とか「輝いているよね」とか言われます」（小杉 2003: 82）。

現在では「フリーター」の定義が錯綜しており、その人数推計にも差がある。佐藤洋作・平塚眞樹はその定義の混乱を整理している[3]（佐藤・平塚編 2005: 58）。それによると、「フリーター」の人数は、内閣府の集計では 417 万人（2002 年）、厚生労働省の集計では 213 万人（2004 年）と大きな開きがある。本論文では「フリーター」のみに着目せず、就業問題を大きな視野で捉えようとしているので、こういった定義の差異にはあまりこだわらず、

[3] 巻末資料の図 1「「フリーター」、「ニート」概念の錯綜」を参照。

「フリーター」を「正規雇用ではなくパートやアルバイトという形態で働いている人」と漠然と捉えておく。

次に「ニート」に注目しよう。本田由紀によると、この言葉が日本においてよく見られるようになったのは2004年あたりからである(本田由紀ほか 2006: 16)。「ニート(NEET)」は、イギリスの本来の定義では、学校に行っておらず、働かず、職業訓練も受けていない人を指しており、失業者も含まれていた。日本での用いられ方は論者によって微妙な差異があるが、失業者と区別するために、求職活動をしてないという要素が必要となる。「ニート」の人数も定義により差はあるが、佐藤・平塚によると、およそ50万人～80万人と推計されている[4](佐藤・平塚編 2005: 58)。玄田有史と曲沼美恵によれば、「ニート」の生活をまかなう主な収入は家族に頼ることが多く(玄田・曲沼 2004: 37)、求職活動をしたことがない理由は人付き合いの不安が最も多い(玄田・曲沼 2004: 41)。こうした点がよく批判される。

求職活動をせず、アルバイトもしていないことから、当初「フリーター」という言葉にまとわりついていた「お気楽な人たち」といった非難の意味合いが「ニート」に向けられた。しかしそういったイメージに合致する人はむしろ少数で、本人は悩んでいることが多い。就職をあきらめている人など、やむを得ず求職活動をしていない人が多数いると推測されるのに、求職活動をしていないという理由で本人の自己責任に回収されがちである。しかし、本田由紀が指摘しているように、ここ十数年で、「ニート」の中でも、働きたいという気持ちを表明していない「非希望型」は増えておらず、働きたいという希望がありながらも具体的な求職行動をとっていない「非求職型」が増えていることを覚えておかなければならない(本田由紀ほか 2006: 24-7)。続けて本田由紀は失業者と「フリーター」が「ニート」よりも増えていることに注意を促している(本田由紀ほか 2006: 28-30)。

第2節　社会的な問題

「フリーター」と「ニート」という二つの言葉について簡単にまとめた。どちらもその定義にぶれがある。そもそも不適切な概念分類なのであろう。問題の立てられ方も様々である。ここでは「フリーター」や「ニート」という分類にこだわらずに、就業に関して現代の若者が抱える社会的問題を整理する。

第1項　仕方のなさそうな問題――失業

そもそも問題なのは、求職者に対する求人が少ないこと、言い換えると、失業率が高いことである。生活保護などの社会保障があるとはいえ[5]、基本的には働かないと生活ができないのであるから。求人数の減少は1990年代初頭のバブル崩壊の影響が大きいであろう[6]。

---

[4] 前出の図1「「フリーター」、「ニート」概念の錯綜」を参照。
[5] 近年では生活保護でさえ切り詰められつつある。
[6] 1980年代における女性の労働力化の影響のほうが大きいかもしれないが、本論文では触

全年齢で失業率は上昇しているが、とりわけ若年層でその傾向が強い[7]。小杉や橘木俊詔が指摘するように、日本ではとりわけ一旦採用した人を解雇するのは困難であることに加え、技術を身に付けた労働者を失いたくないので、どうしても新規採用の抑制に傾きがちなのである[8]（小杉編 2002: 187; 橘木 2004: 142）。先に見たように、失業者の一部または全部が「フリーター」として数えられており、失業者の中で求職をあきらめてしまった人たちが「ニート」に含まれている。「フリーター」や「ニート」のかなりの部分が従来から存在していた失業者というカテゴリーで説明できるのである。

この失業という問題は古典的な問題である。景気循環による失業への対策はジョン・メイナード・ケインズ（John Maynard Keynes）の理論が代表的である。ケインズ理論では構造的に失業者が存在するとされるので、個々の失業者の責を問うのではなく、政府がその対策をすべきだとされる。

第 2 項　自由化――非正規雇用の増大、学校経由の就職の衰退

前項では求人が減って失業率が高まっていると書いた。その中でもとりわけ減っているのは正規雇用の求人で、小杉の言うように、アルバイトに代表される非正規雇用の求人はむしろ増えている（小杉編 2005: 201）。実際に非正規雇用で働く人は増えており、とりわけ若年者の中では非正規雇用の割合が高い[9]。一般に正規雇用のほうが非正規雇用よりも収入が多く、社会保険なども含めるとその差は相当な額になる。雇用の安定性も正規雇用のほうが高く、技能訓練が受けられる可能性も高い。正規雇用から非正規雇用への移行がなぜ起こったのかは逆にこれらの特徴から説明できる。橘木も説明しているように、企業にとって非正規雇用は正規雇用と比べて、技能訓練などの育成にかかるコストや社会保険料を含む人件費を削減でき、人員調整が行いやすいのである（橘木 2004: 144-6）。また、本田由紀が指摘しているように、もともと非正規雇用の割合が多かった第三次産業の比率が高まるサービス経済化もその理由の一つである（本田由紀 2005: 45）。この正規雇用から非正規雇用への移行に伴って、内閣府が認め、熊沢誠が強調するように、正規雇用の労働条件が悪化している（内閣府 2003: 147; 熊沢 2006）。このことには労働組合の組織率の低下も影響しているだろう。また、橘木が「若者は、企業が人材育成コストを抑えるための犠牲になっている」と言うように（橘木 2004: 143-4）、非正規雇用のため職業訓練が受けられず、経験のなさを理由に非正規雇用から抜け出せない悪循環に陥ることもある。

次に就職する時点に注目しよう。日本では 1990 年代までは学校経由の就職が一般的であった。そのシステムは、本田由紀の言うように、いくつかの要因が重なって歴史的に形成されてきた奇妙な慣行であったのかもしれないが（本田由紀 2005）、若者に職を保証する

れない。

[7] 巻末資料の図 2「年齢別完全失業率の推移」を参照。

[8] アメリカでは再雇用を前提として一時解雇するレイオフという慣行がある。

[9] 巻末資料の図 3「雇用者に占める非正規雇用者割合の推移」、図 4「年齢別非正規雇用者の割合」を参照。

という役割を果たしてきた。ところが本田由紀に従えば、1990 年代後半から新規学卒労働市場の自由化が進み、大卒では就職協定が廃止され、高卒では「一人一社制」の緩和が進行している（本田由紀 2005: 181）。インターネットの普及と相まって、大卒の文系では一人当たり数十社を受けるのが当たり前とされ、他方人気企業では膨大なエントリーを受けることになる。志望者にしても、多数の内定をもらえる人と一社からも内定をもらえない人とに分かれる傾向にあるそうである。小杉によると、高卒に関しては、地方部では真面目に高校に行っていても就職できないこともある（小杉編 2005: 103）。

非正規雇用の増大という問題への対策を考えてみよう。非正規雇用そのものが問題なのではなく、非正規雇用における労働環境の悪さが問題なのである。企業に任せておくと劣悪な労働環境になるという点では新しい問題ではないかもしれない。歴史的には、それに対応するために、労働組合が運動をし、労働法が整備された。また、単純に労働が偏在していることに対しては、ワークシェアリング[10]という考え方もある。学校経由の就職の衰退は、教育と関わっている。この学校経由の就職の衰退という問題の論者の多くは職業教育の充実を訴える。

第 3 節　当事者の心理的な問題

前節で見たように、現代若者の職業生活に関しては社会的な問題の影響が大きい。それにもかかわらず、当事者の心理的な問題に帰着させられることが多い。「フリーター」や、とりわけ「ニート」に関して、後藤和智が挙げているように、若者の意識の変容を批判する言説をしばしば見かける（本田由紀ほか 2006）。その多くの場合は怪しげな感情論に終始しており、就業問題を若者の意識にのみ還元するのは正しくないだろう。とはいえそこで言われていることは全くのでたらめというわけでもない。

まず「働かざるもの食うべからず」という命題を根拠とした批判がある。これは物に乏しいときの実際的な帰結に過ぎず、規範ではないと考えられる。だからこの命題は、働かなくても食べられるなら、働かない人を批判する根拠とはなり得ない。批判すべきことは、同じように働かない人であっても、親の所得で食べられる人もいれば食べられない人もいるという格差であろう。近代国家においては生存権が認められており、「働かざるもの食うべからず」ということはない。

このことを認めたとしても、働くことができるのに働かないのはいけないという批判は残る。「（働けるにもかかわらず）働かざるもの食うべからず」というわけである。実際に福祉国家の社会保障の前提も、何らかの理由で働くことができない場合には保障を認めるという形になっている。全く無条件に保障が認められるならわざわざ働こうとする人は少なくなって、制度そのものが立ち行かなくなるという事態は十分に考えられる。しかし、先に見たように、現代の若者の相当程度は働くことができないのである。ところが、現代

10 一人当たりの労働時間を短くすることで、雇用機会を増やすこと。オランダの事例が有名である。

では雇用の自由化や技術の発展のためなどにより、働くことができないことを証明することが困難となっているのである。

また、食べることとは独立して、人間はともかく働くべきであるという批判も存在する。小杉や橘木が指摘するように、とりわけ男性は、主として正規雇用の賃金労働という形態で一定の年齢になったら外で働かなくては一人前ではないとする規範のために、「フリーター」や「ニート」になると周囲からの理解が得られがたく、より悲惨な状況である（小杉編 2002: 170; 橘木 2004: 49)。とはいえこの規範は現在揺れ動いている[11]。

若者の意識に関しては従来の経済学にはおさまらない。若者の意識の問題だからただがんばれという根性論は論外としても、「フリーター」や「ニート」になる若者は高望みしているという説明にはうなずける部分もある。立岩真也は、現在の若者の就業問題は制度に原因があるとしたうえで、若者に向かって次のように言う。「仕事を分けてくれ、それがいやなら金を、というのはもっともな要求です。金を分けろ、それがいやなら仕事を、でもよいのです。そして、所得と就労、両方いっしょでもよいし、その方がよいはずです。とにかく問題を人の心の問題と見ないことです。気持ちを入れ替え、訓練すればなんとかなるなんて話を信じないことです。繰り返しますが、そんなはずないんです。」（立岩 [2005] 2006: 166)。また熊沢も若者が労働組合を通して経営陣に労働条件の改善を主張すべきだとしている（熊沢 2006: 212)。これらは正論だろう。しかし若者たちがこうした主張をしづらいのは、知識の欠如とともに、がんばれば成功する可能性があるという、「強い主体」の想定があるためである。

第 4 節　まとめ

以上述べた、現代若者の就業に関する特徴をまとめよう。

1990 年代初頭のバブル崩壊以降、若年者の完全失業率は高まっている。これには景気要因だけでなく、産業構造の転換も影響している。「フリーター」や「ニート」といった雑多な分類にはこうした失業者がかなりの部分含まれているのである。

しかし、失業者とそうではない「フリーター」や特に「ニート」の人とを明確に分けることは難しい。理念上は求職活動の有無で分けられるが、求職活動をしても成果が得られずにあきらめた場合などを想像すると、この基準を適用することもそう簡単ではない。

ここではむしろ、そのように失業者とそうでない人とを分けることが困難になっていること自体が現代社会の特徴であると考えたい。というのも、採用活動の自由化がこうした傾向を生み出しているからである。学校経由の就職が支配的であったなら、その流れに乗れないと失業者とみなされる。一人一社制ではその一社から採用してもらえない場合には、誇張すると、胸をはって「求職活動をしたが採用されず失業者となった」と言えるが、現在主流となっている自由応募制では可能性が広がった分だけ、どれほど熱心に活動しても求職活動をしつくしたと言うことはできない。一人一社制では、出席日数や成績など評価

[11] しかしここでは、「はじめに」でも断ったように、ジェンダー論にはあまり踏み込まない。

の対象となる事柄が比較的はっきりしていた。しかし現在では「コミュニケーション能力」が求められていると言われる。これも努力すればうまくいくかもしれないという想定につながる。

それゆえ、現代の「フリーター」や「ニート」は批判にさらされるのである。失業者に関しては政府の責任こそ問われ、本人が責められることはあまりない。ところが現代では努力の可能性が広がったがゆえに、本人を責めることができる。確かに自身の能力や社会の需要を考慮することなしに夢ばかりを追っている若者を非難することにも一理ある。しかし、そういったことを考慮してそれなりにがんばりつつも職がない若者を非難するのは酷である。

性役割分業などの規範が衰退してきていることも、当事者の自己責任に回収されるという状態に影響している。国のためであれ、家族のためであれ、そういった規範に従っている限りは全てを自己責任に回収されることはない。しかし現在では株取引などで莫大な富を築くことがある種の理想とされるように、自分の利益を追求することがよしとされつつある（佐藤・平塚編 2005: 237）。教育の場でも自己実現が強調される。誰かのために働くという規範が必ずしもよいとは言えないが、全てを自己責任に押し付けるのも間違っている。現在は、規範がないのではなく、自己責任という規範が勢力を拡大しているのである。

第 2 章　愛情生活

現代の若者にとって職業生活よりも直接的に興味があるのは愛情生活であろう。学校や街中で恋愛について語っている若者をしばしば目にするし、週刊誌などでも「モテ」や「愛され」と題された特集が頻繁になされていたりする[12]。

いささか突然ではあるが、以下ではまず「おたく」に焦点を当てる。というのも、現代若者の愛情生活に適応的でない「おたく」のほうが、その特質をより明らかにしているからである。その上で、彼らが問題としている社会的な問題を整理する。そして心理的な問題を検討する。

第 1 節　「おたく」

「おたく」とは一般的には「特定の趣味に没入する人々」のことを指すが、異性に対して社交的でないというイメージももたれている[13]。そして現在でも、「萌え」と表現されるような、もっぱら虚構のキャラクターに向けられる、彼らの愛情様式が注目されている。そこで、まず恋愛との関係を軸に「おたく」の歴史を振り返る。そして「おたく」の一例として、本田透を取り上げる。その後、「おたく」の特徴をまとめる。

第 1 項　定義・歴史

まず「おたく」の歴史から始めよう。「おたく」という言葉は 1983 年に中森明夫が命名したのが最初であると言われている。とはいえその前から「おたく」が生まれる土壌があったはずなので、1983 年以前の状況から入る。

大塚英志によると、全共闘文化の後に「おたく」が生まれた（大塚 2004: 23-9）。全共闘では、若者は政治といった公的な事柄に関わっていたが、その後の 1980 年頃からは恋愛などの私的な事柄が関心の中心となる。ササキバラ・ゴウは 1970 年代には少年まんがの中で女性の存在がどんどん大きくなり、1980 年に「美少女」が誕生したとしている（ササキバラ 2004: 70）。そして、1980 年代に入ると、それまでの作品とは異なり、「女のために野球をやる」ということを自覚的に描いた『タッチ』[14]のような作品が登場するようになるとサ

---

[12] 巻末資料の図 5「「愛され」特集」を参照。

[13] 浅羽通明による「アニメ、SF、パソコンなどの趣味に没入し同好者以外（とくに異性）には著しく社会性を欠く内向的少年少女を、類型的に「おたく」とよぶ」（石川編 1991）という定義がある。

[14] あだち充原作の野球漫画。『週刊少年サンデー』（小学館）に 1981 年～1986 年まで連載。アニメ化もされ、実写映画化もされた。

物語の中心人物は上杉達也、上杉和也、浅倉南の三人。達也と和也は一卵性双生児だが、性格は異なるタイプである。南は二人の隣に住んでいる。この三人は同じ高校に行き、「甲子園に連れて行って」という南の夢を叶えようと和也は野球部で活躍するが、地区予選決勝の朝に事故で亡くなる。そして達也が和也の意志を引き継ぐ。高校野球と恋愛の二本を軸にしたストーリー展開である。

サキバラは指摘している（ササキバラ 2004: 90-1）。

それでは「おたく」という語を作ったとされる中森の記述を見よう。中森は「あのスタイルでしょ、あの喋りでしょ、あのセーカクでしょ、女なんか出来るわきゃないんだよね」（中森 1983）とか、「実物の女とは話しも出来ないわけ」（中森 1983）のように恋愛と関連させて否定的に記述している。この語は、1988 年に起こった宮崎勤の幼女連続誘拐事件をきっかけとしてさらに否定的な意味合いで広まった。

ところが 1990 年代中ごろから岡田斗司夫などによって「おたく」が肯定的に語られ始める。岡田は大塚英志の『仮想現実批評』を引用しつつ次のように描写している。

> 例えば＜オタク＞は一般の人々に比べて異性の友人の数が多い。十代及び二十代の平均では２．８人であるのに対し、＜オタク＞は６．９人と実に２倍以上である。また男女を問わず、友人そのものの数も多く、社交的である。……
>
> また＜オタク＞は総じて金持ちである。二十代の＜オタク＞の月収が平均２２万７千円であるのに対し、一般の二十代の平均月収は１６万６千円である。……
>
> エンジニアとか医師などが結構目に付く。またその高収入の中から相当に高い割合で思い切りよく遊びに使うのも＜オタク＞の特徴だといえる。その他にも＜オタク＞は一般の人々に比べてテレビの視聴時間が異常に短い、＜オタク＞は趣味の数が多い、＜オタク＞はなぜか「堕落」という言葉が嫌いである、といったこれまでの＜オタク＞像とは相反するデータがいくつもある＞
>
> いかがだろうか？彼らは決して「大人になれないかわいそうな奴等」ではないのだ。（岡田 1996: 37）

今度は「おたく」が恋愛との関連でも肯定的に描かれている。

岡田による過剰なまでのイメージアップ戦略や『新世紀エヴァンゲリオン』[15]のヒットなどもあり「おたく」的な文化が一般に浸透し、2000 年以降は広い分野で肯定的に語られ始める。

斎藤環はおたくの特徴として以下の四点を挙げている。①虚構コンテクストに親和性が高い人、②愛の対象を「所有」するために、虚構化という手段に訴える人、③二重見当識

---

[15] 1995 年 10 月 4 日から 1996 年 3 月 27 日まで全 26 話にわたりテレビ東京系列で放送された連続アニメ作品。監督は庵野秀明。1990 年代を代表するアニメ作品で、新聞などで取り上げられるほどの社会現象となった。

物語の舞台は 2015 年の日本で、人類は使徒という謎の敵の脅威にさらされており、国連の下部組織であるネルフはその使徒と戦うために「エヴァンゲリオン」というロボット型の戦闘兵器を開発していた。主人公の碇シンジ、綾波レイ、惣流・アスカ・ラングレーを中心とした 14 歳の少年少女がエヴァンゲリオンに乗り込んで使徒と戦う。碇シンジの内面が多く描かれている。

この作品については後でも触れる。しばしば『エヴァ』と略され、本論文でもそれに従う。

ならぬ多重見当識を生きる人、④虚構それ自体に性的対象を見い出すことができる人、の四点である（斎藤 2000: 30）。そこでは「虚構」が強調されており、「端的で下世話な表現をするなら、アニメキャラで「抜く」ことが出来るか否か、それがおたく-非おたくの一つの分岐点ではないだろうか。不案内な方のために注釈しておくと、「アニメで抜けるか」とは、「アニメに描かれた女性キャラクターのイメージを利用して、マスターベーションが可能であるか」というほどの意味である。」（斎藤 2000: 53）という基準を示している[16]。そして日本ではおたくと関連して戦闘美少女というモチーフが発展してきたと斎藤は主張している。東浩紀は哲学や思想の方面からアプローチし、「おたく」を「コミック、アニメ、ゲーム、パーソナル・コンピュータ、ＳＦ、特撮、フィギュアそのほか、たがいに深く結びついた一群のサブカルチャーに耽溺する人々の総称である」（東 2001: 8）と暫定的に定義している。そして東は、「おたく」の間では、冷戦構造の解体がその最たるものである、「大きな物語」の失墜が進んでおり、データベース的な消費が優勢であるとしている（東 2001）。上記の斎藤、東らの対談では、二人の相違点が、おたくを「人格」として見るか「表象」として見るかの違いであると整理されている（東編 2003）。斎藤は「おたく」を人格として見た結果、現実の異性との恋愛を望みながらも、そこからは遠い人であると思っているようである[17]。東は表象の観点から論じるので「おたく」と恋愛とは関係づけられない。

2005 年あたりから、「おたく」を題材にした『電車男』という作品がヒットしたことなどもあり、「おたく」は「萌え」といった言葉ともにさらに市民権を得ることになる。「おたく」は経済の観点から論じられたり、表象に注目されたりするのだが、ここではそれらは置いておいて、自らを「おたく」と規定して語る本田透に注目したい。彼は「おたく」について、「この八〇年代という時代に、ナンパや「軽薄短小」と呼ばれる一連の「恋愛資本主義文化」の裏側で密かに誕生し、徐々に拡大していった勢力が、「オタク」なのだ。オタクは一言で言うと「恋愛資本主義に組み込まれなかった人々」と定義できるだろう。」（本田透 2005a: 22）としている。建築の観点から「おたく」を論じている森川嘉一郎も「オタクは半ばモテない人間の共同体と化して」（森川 2006: 54）いると言っている。

「おたく」の代表的な定義と歴史は以上の通りである。本論文では「おたく」を「虚構のキャラクターを愛する人々」と定義する。精神医学的に分類するなら性対象倒錯である。そこで、同性愛など他の性対象倒錯をも考慮しながら既存の分類を参照しよう。フロイトは絶対的な倒錯と機会的な倒錯とを分けている（Freud 1905=1966: 8-9）。「おたく」もそ

---

16 斎藤はわかりやすさを重視してこのような基準を示している。しかし、より正確には、「アニメキャラで抜く」ことができなくても、そのキャラクターに性的な愛情を持っている場合がある。「性的」と「性器的」は必ずしも一致しない。こうした観点から、フロイトは、子供にも性欲があると主張している（Freud 1905=1966）。

17 斎藤の著作中には「個人的な印象では、おたく人生の「上がり」とは、異性のおたくパートナーとの結婚とみなされているふしがある。」（斎藤 2000: 53）や「男性おたく達は、美少女アニメやフィギュアにうつつを抜かしながらも、「現実」において恋人を持つことを切望している。」（斎藤 2006: 49）という記述が見られる。

れと同じように考えられるのではないだろうか。つまり、絶対的な「おたく」と、「モテない」ためになる「おたく」とに分類できるのである。

これは、「フリーター」を分類する際に用いられた「夢追い型」と「やむを得ず型」というカテゴリーと同型である。岡田や東が描いているような、異性から好かれないこともないが、「おたく」に肯定的な意味合いを見出し、自ら進んで「おたく」になったような人たちが「夢追い型」で、斎藤や本田透が描いているような、異性から好かれないためにやむを得ずおたくになった人たちが「やむを得ず型」に当たる。「フリーター」の部分でも述べたように、もちろんこの両類型は、はっきりと分類できない。しかし、現在ではおたくたちは自分から進んで選び取ったものであると描写されることが多いので、就業問題と同じように、「やむを得ず型」の存在をもっと強調してよいだろう[18]。

第 2 項　本田透の事例[19]

前項でおたくの歴史、定義を簡単にまとめたが、なじみのない方にとっては、実際の「おたく」の姿を想像しがたいだろう。そこで本項では「おたく」の実例を挙げる。先ほども登場した本田透である。彼に「おたく」のすべてを代表させることはできないが、自ら「おたく」活動をしながら「おたく」について論じているので資料が豊富にあり、適切であると判断した。彼の主著である『電波男』は「おたく」からの評判もよい[20]。

---

18 「おたく」たちの姿を描いた『げんしけん』という作品がある。そこでは、女性に好かれ、恋人もいるのに「おたく」活動をする「夢追い型」の高坂真琴と、「やむを得ず型」と言えそうな、笹原完士、斑目晴信などその他の人々との対照的な構図がしばしば見られる。その作品中では「おたくはなろうとしてなるもんじゃない」といったことが言われる。

19 本項では本田透の著作からの引用を多数示す。その引用中には独特の表現が頻出する。主なものには筆者による注釈を施したが、そのまま残してある部分もある。

20 参考までに Amazon.co.jp での『電波男』のカスタマーレビューからいくつか抜粋する（丸カッコ内はレビュアー名）。レビュー全体の中には批判もあったが、自らを「おたく」と規定した上での批判はなかった。

・オタクの魂の叫びがここにある！（the_drill ）

・「オタク、そしてキモメンから見た現代社会」と言うものを、見事に書き切っていると思います。（しがない１オタク）

・うれしい。このような本に出会えて本当にうれしい。……いまこそ、この本を手に取り真実の愛を探しに行こう。２次元へ！（aias ）

・悪い事は言わない。
恋愛に悩む毒男（おたく）のみなさん。
この本「電波男」を買ってみてください。
今の世界がどんな残酷な物かがわかります。（907@にゃも）

・この本が著者の、そしてオタクと括られた者達の現実を見据えた上での悲痛なまでの、リアルな叫びを収めた書であることは間違いないのです。（字数制限反対！）

・これまで、「自分は間違っているのか？」そう自問自答を繰り返してきたオタクたちにとってまさに救いの一冊となる良書である。……まさに今まで虐げられてきた我々オタクが言いたかったことを全て言い切ってくれた、今後の著者の活躍を期待したい。（会社クビになった真性負け組オタク）

彼の略歴は次の通りである。『電波大戦』の著者略歴から引用する。

> 1969 年神戸生まれ。「女はおっかねえ」という理由で高校を中退後、ひきこもって自宅で受験勉強。大検から早稲田大学第一文学部に進むがやはり「女はおっかねぇ」という理由で中退。その後、いろいろなイベントを経た末に、Web サイト「しろはた」の更新に夢中になって約 10 年を浪費。アントニオ猪木信者、DVD レコーダー評論家を経て現在はライトノベル［まんがやアニメ風のイラストや世界観が見られる小説］作家。（本田透 2005b）

『電波男』のあとがきには彼の家庭環境が描かれている。それによると彼の母親は家を守るために強要されて見合い結婚をしたが、この夫は母と息子に暴力をふるい、出て行った挙句、養育費を払わなかった。本田透は母親に部屋に閉じ込められずっと監視された。その絶望の中でいろいろなアニメを見、「二次元[21]」世界を妄想[22]し始めた。母親の死後、大学へ進学する。しかし現実の女性にはひどい扱いを受けた。そして阪神大震災で家を失い、仕事もなくした。そのときも恋愛ゲームと『エヴァ』とに救われた。「おたく」としておとなしく暮らしていたのに、「おたく」をやめろと言われて、それに反論するために『電波男』を書いた（本田透 2005a: 394-401）。

彼の現在の生活は次のようである。

> 朝目覚めると、まずレコーダーを起動してアニメの番組予約をセットする。そして朝食を食べながら、昨夜録画したアニメを DVD や BD などのディスクメディアにダビングする。……レコーダーで録画した作品の中で気に入ったものは、後日パッケージ版の DVD を購入する。……昼間は原稿書きの仕事をして、夜は打ち合わせ。運よく自由時間ができた時にはすかさず溜め込んでいるアニメやゲームの消化活動に入る。（本田透 2005c: 14-5）

> 僕は仕事（オタク）が趣味という状態なので一日中仕事をしているわけだが、着ている服はユニクロで買った無個性なシャツとジーンズだったりする。なぜこうなるかというと、まず萌えアイテムにお金を使うので、ファッションにお金をかける余裕がな

・ともかく「おたく」文化の当事者として、正面からこれを論じた大部の評論として、同時代的価値は高いし、歴史的価値はさらに高い一冊である。（薄皮あんぱん）
・オタクの優しい反抗であり、血の叫びでもある（もりすえしんや）

[21] アニメ等の世界を俗に「二次元」と呼ぶ。その用法に従って、アニメ等の女性キャラクターのことを「二次元女性」と言ったりする。「二次元」に対して「三次元」は、現実の世界を意味する。

[22] 統合失調症などで見られる、精神医学で言うところの「妄想」とは異なる。単に空想することを自嘲して、しばしばこのように用いられる。

い。（本田透 2005c: 19）

彼の恋愛遍歴を辿ろう。幼少期には母親によって女の子として育てられた。

> 俺が女の子と親しくすると、母は気が狂ったようにヒステリー[23]を起こして、その女の子が二度と俺に近寄らないように様々な邪魔をした。母は、俺が貰ってきたラブレターを取り上げて、その子の前で引き裂いて捨てた。俺が連れてきたガールフレンドをカルト宗教に勧誘して逃亡させた。（本田透 2005a: 395）

高校ではひどい目にあったために中退している。

> 僕、そんな［いたずらでラブレターをもらう］目に遭ってたら高校中退してますよ！まあ実際にそんな目に遭って中退したんですけど orz［落胆した様子を表すアスキーアート（コンピュータで用いられているアスキーコードに含まれる文字や記号を使った表現）］　で、そんな目に遭って中退したら、また元いた高校から女の子が来て、ノコノコ出て行ったらまた騙されて。中退した後もまた酷い目に遭ったという。……本当、悲惨でした。ボロボロになってひきこもってるのに、それをまた引きずり出して痛めつけるという、本当に酷いですよ。僕、高校は 3 ヶ月しか行ってないのに、すごく酷い目に遭って。（本田透 2005b: 172）

大学でも似たような状況である。

> 現実世界の女は、顔の良い男、金を持っている男、車を持っている男、そんな男だけを漁っていた。……結局、俺は三次元の女とは恋愛できなかった。女は、誰も彼も一様に、しゃっつらだけ綺麗にしていても、心が冷たかった。平然と人を傷つけ、踏みにじる言葉ばかりを、俺は聞かされ続けた。……大学時代、遊べるだけの金が残っていて、ゴテゴテと着飾ってグラムロックのバンドなんかをやってフラフラしていた頃には、ちょろちょろと近寄ってきたり、酷いのになるとストーカーになる女もいたが、大学院の面接で教授と大喧嘩して追い出され、ストレス食いで太り、地震で家が潰れ、仕事もなくし、一文無しになったとたん、俺の周りにいた女は蜘蛛の子を散らすように一人残らず逃げ去った。（本田透 2005a: 398-9）

そして現在では次のような状態である。

---

[23] ここでの「ヒステリー」は、必ずしも精神分析や精神医学での「ヒステリー」ではなく、「感情的な状態」程度の意味であると思われる。

たまたま仕事絡みで 30 歳独身女性編集者と、なんとなく飯を食ったりメールのやりとりをするようになっていた。……たいてい、喫茶店で 2 時間ほど喋っているうちに、突然相手の顔色が変わり、「ドン引き」の表情になっていくのだ。……しかし、しつこいようだが俺ももう 35 歳、いい加減に過去の経験から学習は済ませている。……だからその日、俺は慎重を期して、ほぼ完璧に喫茶店のトラップを潜り抜けた……ような気がした。だが、最後の最後に、虎の尾を踏んでしまったっ……。罠っ……罠っ……！もう大丈夫だろうと油断した俺は、うっかり、「お互い 30 過ぎて独身って寂しいですね～」と愛想笑いを浮かべて口を滑らせてしまったのだ。その瞬間、さっきまで笑っていた彼女は、まなじりを吊り上げ、怒髪天を突く勢いで叫んだ。「あなたと一緒にしないで！」（本田透 2005a: 12-4）

これらをまとめると次のようになる。

キモメン［異性から見て容姿や雰囲気などが気持ち悪い人。イケメンの対義語。主に男性に対して用いられる］・オタク・ニート・貧乏の「モテない喪男［モテない男性を意味する。インターネット掲示板でよく用いられる］要素のグランドスラム」を 16 歳にして達成し、あまりにも女子に迫害されるので高校を 2 回中退、大学を 1 回中退という、生きているのが不思議なぐらいのダメダメぶり。はっきり言って、モテないことには自信があります！(｀・ω・´)ｼｬｷｰﾝ 女の子にフラれたどころか晒し者にされてm9(^ロ^)ﾌﾟｷﾞｬｰｯ とみんなに嗤われたりして学校が恐ろしくなって登校拒否になってひきこもったら、今度はイケメンの気をひくために俺を色仕掛けで学校に呼び戻そうとするさらにおそろしい女に騙され……とか、とにかくオリの生きていた世界では女は悪魔そのものでした。

10 年前、仕事をやめて田舎の公務員になろうとしたその日に地震で田舎の実家が全壊して何もかもを失って心神喪失状態のひきこもりになったときにも、Age のエロゲー［「ギャルゲー」などとも呼ばれる、恋愛シュミレーションゲーム］『君が望む永遠』の水月ちゃんのように落ち込むオリを励ましてくれたり飯を作ってくれたり抱きついてくれたりするような女など現実に存在するはずがなく、女はみんな蜘蛛の子を散らすように逃げていきました。その後に続いたニート・フリーター状態の 10 年間、オリは女と口をきく機会すらございませんでしたよ。いやもう「モテない」ことなら簡単ですよ。（本田透 2005b: 9-10）

このように本田透は普通の恋愛を否定するが、「二次元」の純愛は肯定する。

純愛を突き詰めたら、２次元のみさき先輩（PC ゲーム『ONE』に登場する川名みさき先輩というキャラクター。主人公の高校の先輩。盲目の大食いチャンピオン。特技は

悪質な冗談。設定だけみてると『餓狼伝』のクライ・ベイビー・サクラに似ている。現在、本田の脳内奥さん）に行き着いてしまいました(･ω･)。（本田透 2005b: 17）

このように、本田透は「やむを得ず型」の「おたく」だと推測される。「三次元」の女性にひどいことをされたために、「二次元」へと進んだことが明らかに見て取れるからである。しかし現在では、「萌え」という「二次元」での純愛を理想に掲げ、「三次元」の女性から遠ざかろうとしているので、「夢追い型」のようにも見える。ここに、実際のやむを得ない状況を覆い隠すために夢を追うという、就業問題と同じ構図が現れている。

第 3 項　特徴

上記の本田透に代表されるような、「やむを得ず型」の「おたく」の特徴を探る。「やむを得ず型」に限るのは、「夢追い型」の「おたく」はおそらくいつの時代にも一定数存在しただろうし、現代若者の愛情生活の特徴を浮き彫りにするためには「やむを得ず型」に注目するほうがよいと判断したからである。

「おたく」の特徴を論じる前に、本田透も愛好していた『エヴァ』を紹介しておく[24]。この作品は「おたく」史上最も話題になったものであり、現代の「おたく」を語る際には触れないわけにはいかない。

『エヴァ』は『機動戦士ガンダム』[25]とよく比較される。どちらも少年がロボットに乗り込んで敵と戦うというスタイルである。前者と後者には 15 年ほどの隔たりがあり、その間に冷戦構造の解体やバブル崩壊があった。「はじめに」でも書いたように、本論文で扱う現代は『エヴァ』の時代のほうであり、『ガンダム』と照らし合わせることによって現代の特徴を浮き彫りにする。

『ガンダム』と『エヴァ』との最大の相違点は、東の言葉を借りると、「大きな物語」の有無である（東 2001: 58-62）。『ガンダム』では作品内に統一された歴史や世界観が存在するのに対し、『エヴァ』では敵とされる使徒の動機なども不明であり、わけのわからなさが強調されている。それゆえ、『エヴァ』の魅力はストーリーや世界観よりも、キャラクターへの萌えにあると考えられる。その側面が顕著に表れているのは、TV 版の最終 2 話、通称「学園エヴァ」である。そこではそれまでの話とは独立した形で、シンジがアスカやレイと学校での日常を過ごすという別の世界が描かれる。

---

[24] 基本的な情報は脚注 15 を参照。

[25] 1979 年 4 月 7 日から 1980 年 1 月 26 日にかけて、全 43 話がテレビ朝日系列で放送された連続アニメ作品。監督は富野由悠季。映画や続編なども多数作られている。
物語は、主人公の少年アムロ・レイが、ジオン軍の攻撃に巻き込まれ、ジオン軍と対立関係にある連邦軍のモビルスーツ（人が乗り込んで操縦するロボット型の兵器）に乗り込んで戦うことから始まり、その後も戦闘を重ねる。宿敵であるジオン軍のシャア・アズナブルを始めとする様々な人との出会いを通して、アムロ達が成長してゆく姿が描かれる。
以下では『ガンダム』と略す。

現在では「おたく」の愛好する典型的な作品分野とされる「ギャルゲー」などと呼ばれる恋愛シュミレーションゲームは、この「学園エヴァ」にその原型が見られる。そこでは妹、幼なじみ、メイドといった登場人物が主人公であるプレイヤーを好きになっていく。「ギャルゲー」においては、東が指摘しているように、ポルノグラフィックな描写が必須なのではなく（東 2001: 114）、純愛が強調されることが多い（東 2001: 123）。先ほど挙げた、妹、幼なじみ、メイドなどが示すように、自己決定による選択の結果生じる関係ではなく、運命的、強制的な関係性が好まれる。また、強制的な関係であるとともに、安定的な関係である。言うまでもないことだが、キャラクターは予期せぬ反抗をすることはない。強いて言うなら、グッズを買うためのお金が必要なだけである。「おたく」の人の中には、自らの生活を切り詰めてまで可処分所得の大半をグッズに使う人がいるが、彼らの姿は家族を養うために必死で働くという一昔前の理想像と重なるところがある。こうした強制的で安定的な関係は母親との関係をモデルにしているのではないだろうか。『エヴァ』においてははっきりと表れているように、これらの「萌え」の対象となるキャラクターは母親をモデルにしていることが見て取れる。

その強制的な関係と安定的な関係には本田透の言う「恋愛資本主義」への対抗が含まれている。自由競争の支配する「恋愛資本主義」の下では、自分たちは不利益を被るので、昔のような強制的で安定的な関係を希求するのである。「おたく」がときに保守的に見えるのは、昔の規範を持ち出すためだろう。

また、一つの作品内で考えると強制的な関係ではあるが、その実「おたく」たちは複数の作品からキャラクターとの関係を自由に選択しているのである。一つの作品内に限ったとしても、東が指摘しているように、複数の視点を持っている（東 2001）。さらに、その中で一つの視点に限れば、プレイヤーとキャラクターは等しく強制的な関係にあるように見えるが、プレイヤーが圧倒的に有利な状況にある。ある意味では「おたく」たちも、自由に愛情の対象を選ぶという現在支配的な価値観を受け入れているのである。もちろん、それを現実世界で追求するのと、あくまでも虚構の世界にとどめるのとでは違ってはいるが。本田透に「やむを得ず型」と「夢追い型」の同居が見られたのもこの理由による。

以上の「おたく」の特徴は、主として男性を想定している。女性は、男性キャラクター同士の同性愛関係を描く「やおい」を好むと一般に言われるが、本論文ではこれ以上論じない。

第 2 節　社会的な問題

「おたく」に注目することによって、現代若者の愛情生活の様相が浮かび上がる。そこでの問題点を整理しよう。

第 1 項　仕方のなさそうな問題――愛されないこと

本田透は自分が「三次元」では恋愛できないことを強調し、「二次元」での純愛を称賛す

る。「おたく」とは関わりはないが、小谷野敦も恋愛できない人たちの存在を強調し、片思いを推奨する（小谷野 1999）。どちらも愛されることはできないが、愛することはできるということである。小谷野が強調するように、愛することなら誰にでも可能かもしれないが、愛されることはそうではない（小谷野 1999）。容姿や話術といった属性（能力）が必要になる。恋愛ができないことは人によっては大きな悩みになるが、それはいつの時代にも見られた問題である。

愛されないことは仕方ないという、このような当たり前のことを強調しなければならないのは、現在では、恋愛といえば双方の思いが調和するものだという暗黙の想定があるだろうからである。その証拠に、広辞苑の「恋愛」の項目を参照すると、「（love の訳語）男女が互いに相手をこいしたうこと。また、その感情。こい。［傍点は引用者］」（新村編 1998）となっている。そこでは端から片思いという状態は排除されているのである。しかし、実際の経験に照らし合わせれば、そのように双方の思いが調和しないこともあることに多くの人が気づくだろう。双方の思いが調和するという前提に合わせるためには、いかに愛されるかが重要になる。愛されてこそ、双方の思いが調和するという恋愛になるのである。

そのことをはっきりさせるために、「恋愛」という語の歴史を参照しよう。

柳父章によると「恋愛」という語は英語のラブ（love）の訳語として作り出されて明治期に浸透し、万葉の歌に見られるような日本古来の心と肉体とを切り離さない「恋」、「愛」、「情」、「色」などとは違い、ロマンス（romance）とも通じる「深く魂より愛する」といった意味合いであった（柳父 1982: 89-97）。小谷野の別の言い方では、「恋」は遊郭を連想させたので「恋愛」という新しい語が発明されたのである（小谷野編 2003: 123）。例えば水野尚が言うように、一般にこのような意味での恋愛は、12 世紀のヨーロッパで見られた宮廷恋愛に由来しているとされている（水野 2006）。

その後、北村透谷を始めとした進歩的な人々が恋愛を賛美したが、明治時代に恋愛は一般的ではなかった。その後恋愛結婚が一般の人々の理想とされるようになった。このことについては次節で詳しく述べる。また、セクシュアリティとの関係で恋愛が称揚される傾向が強まる。これも次節で述べる。

こうして、現在では結婚やセクシュアリティの前提として恋愛が要請されるため、恋愛が若者に重視されるわけである。ところで、「恋愛」という語は現代でも「深く魂より愛する」といったような意味で用いられているのであろうか。こうすれば恋愛がうまくいくと細かい技術指導をする雑誌の記事などを読んでいるととてもそうとは思えない。山田昌弘の、「恋愛は、もっとも広義にとった場合、特定の相手と心理的、身体的コミュニケーションをとりたい欲求と位置づけられる」（山田 1994: 122）といった定義のほうが現状に即しており、「恋愛と呼ばれる感情は主観的に構成される」（山田 1994: 120）のである。また、明治期の意味合いとの相違点を強調して、宮原浩二郎は次のように述べている。「現在の日本語では、「個性に執着」しなくても、相手を「純化」「理想化」しなくても、また「対等の人格」や「精神的愛」を前提にしなくても、とにかく相手が「すき」であれば、「恋愛」

感情があると言う。「恋愛」は、「すきだ」とか「つきあっている」という主観的な口言葉を、客観的な書き言葉に置き換えた言葉なのである」（宮原 1998: 126）。

恋愛ができない人がいることは問題ではあるが、その対策は難しい。職業生活と違って、恋人を再配分するわけにはいかない。しかし職業生活にはない有利さもある。金銭は基本的に多ければ多いほどよく、誰かが得をすれば誰かが損をするというゼロサムゲームの様相を呈する。愛情生活では、多様な好みがあり得るので、うまくすれば多くの人が満足できる。

社会的な対策は難しいが、当人の気の持ちようで楽になる部分も大きいだろう。「やむを得ず型」の「おたく」たちは、恋愛ができないことそのものよりも、恋愛ができないと人間としての価値はないといった観念に苦しんでいるのかもしれない。先に見たように、恋愛では双方の思いが調和して、誰もがうまくいくといった仮定のもとでは、恋愛ができない人など存在しないことになっている。そうした観念に苦しんでいる人たちには、恋愛はいつでも誰にでもできるものではないと強調することが救いになるかもしれない。

第 2 項　自由化――「親密性パラダイム」

前項では恋愛ができないことという、仕方のなさそうな問題を取り上げた。その際にも少し触れたが、現在では恋愛が結婚や性行為の前提条件とされている。いわゆる性・愛・結婚の三位一体であるが、性と結婚との結びつきは近年ではなくなりつつあり、愛（恋愛）と結婚及び性との結びつきが残っているのである。このことが、恋愛のできない苦しみの中心を成しているのかもしれない。

そこでまずは結婚とセクシュアリティの簡単な歴史を、恋愛との関係という観点から記述したい。

まずは結婚について考えよう。そもそも恋愛は結婚と対立することはあっても、不可分のものとされることはなかった。恋愛の起源とされる宮廷恋愛では、水野に従うと、恋愛が、貴族制の産物である結婚とは基本的に対立していた（水野 2006: 45）。貴族ではない一般の人々は恋愛ということさえ考えなかっただろう。日本においても明治以前の農村では共同体の中で気の合う者同士が結婚する形が多かったと推測できる。明治に入りもともとは貴族階級のものであった見合い結婚が一般化する。そうすると結婚が恋愛とは対立する事態も発生した。ところが、井上俊の考察によると、1970 年代までには、恋愛と結婚とが結び付けられる傾向が強くなり、恋愛結婚が一般化した（井上 1973）。山田の言う「恋愛と結婚の結合戦略」（山田 1994: 126）である。ちょうど恋愛の意味合いが「深く魂より愛する」ものから主観的な欲求へと、つまり恋愛が激烈で制御できないものから飼いならすことができるものへと移行してきたことと並行している。国立社会保障・人口問題研究所の調査によると、1960 年代後半には恋愛結婚の割合が見合い結婚の割合を上回り、それ以降も恋愛結婚は増加して今日では圧倒的な割合を占めている（国立社会保障・人口問題研究所 2006）。さらに、小谷野によると、見合い結婚に含むべき結婚相談所でさえも恋愛を

していると思わせる仕組みになっているそうである（小谷野 2005）。加えて、現在結婚していても恋愛を感じなくなったら、つまり相手に欲求を引きつけられることがなくなったら、特にほかに恋愛を感じる人がいればなおさら、離婚することが正当化される傾向にある。

それでは次にセクリュアリティについて考えよう。先にあげた柳父による恋愛の定義からも窺えるように、日本においてはおよそ明治以前には、セクシュアリティについてさほど論じられていなかったように推測される。

明治以降の様子については赤川学に詳しい。彼によると、明治期には 1875 年に出版された『造化機論』を始めとした、開化セクソロジーが導入される。そこでは解剖学的な知識が紹介され、正規の夫婦内での生殖が持ち上げられていた（赤川 1999: 104）が、恋愛とは関係なかった。その後「性欲」という用語が広まり、性欲は本能であるので何らかの方法で満たさなければならなく、どのようにして満たすのがよいかといった「性欲のエコノミー問題」が論じられるようになる（赤川 1999: 179-202）。ここでもセクシュアリティ（性欲）と恋愛とは分離させられている。1970 年代以降には人々の関心の中心は、この「性欲のエコノミー」から、「親密性パラダイム」へと移行することになる（赤川 1999: 376）。赤川の言う「親密性パラダイム」とは、「あらゆる性行動の領域において、その当否を判断する基準として「愛」や「親密性」が大きな位置を占めるようになってきていること」（赤川 1999: 382）であり、「アンソニー・ギデンズいうところの「親密な関係性」ないし「純粋な関係性」に近似する概念」（赤川 1999: 382）である。赤川はまた、「親密性パラダイム」では「愛さえあれば婚姻外セックスも同性愛も婚前セックスも肯定され、同様に愛がなければ、婚姻内のセックスであろうとも否定される」（赤川 1999: 383）としている。赤川は続けて、現代では「親密性パラダイム」の一人勝ちといった状態であり、それに勝てるような展望は開かれていない（赤川 1999: 383-4）としながらも、誰もが愛や親密性を求めて生きなければならない「親密性パラダイム」の息苦しさを指摘している（赤川 1999: 390-1）。現代ではセクシュアリティと恋愛とが密接に結びついているのである。

「愛さえあればどのような性行為をしてもよい」という「親密性パラダイム」の裏を返せば、愛が認められないような親密性に欠ける行為は非難される。「セクハラ」などは当然非難されることに加え、あらゆる倒錯的行為が市民権を得つつある現在でさえも、本人の同意が認められない小さい子どもを相手とする性的な行為は糾弾されるのである。「おたく」が、いくら宮崎勤の連続幼女誘拐事件があったとはいえ、ペドフィリアとあまりに強く結び付けられがちなのはこのためかもしれない。どちらも相手の同意を問うことができないという点で共通しているので、相手の欲求を引きつけて同意を得ようと努力している人たちから非難されると考えることができる。

ここまで、結婚とセクシュアリティの、恋愛に対する関係を見てきた。両者とも 1970 年代から恋愛との結びつきが目立つようになり、現代では恋愛抜きでは結婚も性行為も認められないほどにまでその結びつきが強まっている。赤川は「親密性パラダイム」という言

葉をもっぱらセクシュアリティとの関連で用いていたが、結婚に関しても、「親密性パラダイム」が支配していると言えよう。本論文ではこれ以降、「親密性パラダイム」という言葉をセクシュアリティだけでなく、結婚にまで拡張して用いる。

現代では極めて強い影響力を持っている「親密性パラダイム」では「恋愛（愛）」が要請される。しかし、恋愛の内実は不確かであり、実際に愛情生活を営むためにはあまり高尚なものを求めるわけにもいかず、恋愛が「相手の同意を得ること」程度の意味しか持っていないように感じられる。そうして恋愛が、前項で紹介したような、「特定の相手と心理的、身体的コミュニケーションをとりたい欲求」ほどのものでしかなくなる。

恋愛が「深く魂より愛する」のではなく「コミュニケーションをとりたい欲求」に拠っているのなら、その相手はある特定の人でなければならないわけではなく、交換可能である。実際、雑誌やテレビで組まれている恋愛特集では不特定多数の相手が想定されている。さらにただ交換可能であるだけではなく、序列化される。コミュニケーションをとりたい欲求を多く引きつける人と、あまり引きつけない人との差が発生するのである。こうして人々に商品価値が付与され、いわば恋愛市場が成立するのである。それゆえ、エコノミストである森永卓郎の次のような記述が、ある種の描写としてそれなりの説得力をもつ。

> 散弾銃方式で撃ち落とすことのできた女性［女性の集団に手当たり次第に声をかけ、いわば散弾銃の雨を降らせた結果脈があった女性］を口説くときには、「こんなことを言ったら逃げてしまうのではないか」などとあれこれ考える前に、「ボクと付き合ってください」と気軽に言ってしまうことだ。そして、女性に断られたら、「失礼しました」とサッと身を引き、絶対に深追いをしてはいけない。すぐに意識を切り替えて、次の女性に向かうのである。それでもダメな場合は、また散弾を放てばいいだけの話だ。（森永 2003: 178）

さらに、インターネットの出会い系サイトが、実際にどれほど真剣に利用されているかはともかくとして、こういった事態を端的に示している。携帯電話やインターネットの普及が、恋愛の自由化を促進しているのである。

ここまでで論じてきたように、現代では愛情生活における自由化が進行している。「親密性パラダイム」という言葉で表現されるように、結婚やセクシュアリティに恋愛が必要不可欠とされる。そしてその恋愛は「コミュニケーションをとりたい欲求」ほどのものでしかなく、相手の人格を深く尊敬することなどよりも、相手を物と見なしていかに多くの欲求を獲得するかが重視される傾向にある。こうした一連の変化に伴っていくつかの問題が目立つようになってきている。

第一に、結婚やセクシュアリティに恋愛が必要とされることによって、恋愛ができない場合の不具合が非常に大きくなっている。このような状況で恋愛ができないということは、結婚や性行為もできないことを導くので、結婚や性行為を望む人にとって非常に大きな問

題になる。

そして第二に、恋愛が相手にコミュニケーションをとりたい欲求でしかないなら、そこでの争いは避けられない。欲求と欲求がぶつかり合うと争いが生じる。例えば、A さんは B さんとコミュニケーションをとりたいと思っているが、B さんは A さんとコミュニケーションをとりたいとは思っていない場合を想像しよう。A さんは B さんに恋愛感情を抱いているが、B さんは A さんに恋愛感情を抱いてないということである。恋愛が絶対的な価値を持っており、そのほかに二人の関係を調整するような規範がないとするなら、争いが発生しがちである。A さんが B さんの上司であったりすると、B さんは「ストーカー」や「セクハラ」で苦しむかもしれない。逆に B さんのほうが A さんより強い立場にあるなら、「ストーカー」や「セクハラ」だとして、A さんは B さんの身の回りから排除されるかもしれない。「セクハラ」や「ストーカー」といった問題は、当事者の内面を基準にしているので、原理的にはどちらが正しいかを決めることができないのである。もちろん、実際の裁判などでは、外的な行為も考慮される。現実的には「ストーカー」や「セクハラ」を甘受する事例が多く、現在のようにそれらを訴える道が開かれたことには歴史的な意義がある。しかし、「ストーカー」や「セクハラ」に対して敏感になりすぎて、少しでもその疑いがあれば相手を排除しようとするのも問題である。

外的な規範や制度ではなく、恋愛という内面が重視されるために争いが生じやすくなるのである。恋愛感情があるからといってそれを相手に押し付けるのも問題であり、恋愛感情がないからといって相手をひどく扱うことも問題である。後者の問題は本章で紹介した本田透の事例に見られる。恋愛に関してすべてが内面の欲求に還元され、外的な基準が衰退していったために、恋愛が困難になっているのである。そのことを山田は次のように表現している。「現在恋愛が難しくなっているのは、何が恋愛かという主観的構成の規則に対する合意が失われつつあるからだ」（山田 1994: 120）。

第三に、恋愛が商品化されること、言い換えると、恋愛市場が現れることによって、恋愛ができる人とできない人とに二極化する傾向にあるのではないだろうか。商品化されるということは、一つの量的基準によってその人の価値が量られることである。そうすると価値の高い人と低い人との差が発生する。商品化されていないと価値を比べることができない。本田透が主張しているように、「おたく」は、この恋愛市場に反対しているのではないだろうか。その恋愛市場で不利益を被る人たち、つまり「モテない」人たちが「おたく」になりやすいということもうなづける。こうした弱者でなくても、恋愛が商品化されることに反感を覚える人たちもいるだろう。

次に恋愛の自由化によって目立つようになったこれらの問題に対する対策を考えよう。

恋愛が結婚や性行為に必須とされること自体が悪いとは主張しづらい。「親密性パラダイム」という言葉を作った赤川も、その息苦しさを指摘していた。とはいえ、必ずしも恋愛があるわけではないような、いわば友愛結婚のような形態もあってよいだろうし、恋愛と切り離して性行為そのものを楽しむのもよいかもしれない。

しかし、恋愛がコミュニケーションをとりたい欲求に還元され、それが絶対的な基準とされることには反対したい。社会生活を営む上では欲求を我慢することも必要である。したくてもしてはいけないことがあり、したくなくてもしなくてはいけないことがある。それは考えてみれば当たり前のことである。してよいこととよくないことの基準を決める際に参照される価値観はいろいろ考えられるだろう。しかしその基準を内面の欲求にすることは、結果的に強い人に加担することになるだけで、何の基準も示していない。女性の発言力を高めるという政治的意義は否定しないが、上野千鶴子の言う「したいときにしたい相手とセックスする自由」（上野 1998: 29）などは否定すべきである。

恋愛の商品化に伴い弱者が生まれるという問題は深刻である。「おたく」のように、恋愛市場の外へ出ようとするのも一つの手ではある。

第 3 節　当事者の心理的な問題

前節で立ち入って論じたように、現代若者の愛情生活では、「親密性パラダイム」という言葉に代表されるような自由化が進行しており、それに伴っていくつかの問題が前景化していた。しかしこうしたことが強調されることは少なく、「おたく」のように愛情生活に適応的でない人がいたら、その当事者の心理が批判されることが多い。

「おたく」に関しては、宮崎勤の幼女連続誘拐事件の影響もあり、「おたく」とはペドフィリアであり、誘拐などの犯罪と結びつきやすいという観念がある。そうした犯罪が起こると、犯人は「おたく」なのではないかと言われたりする。しかし、斎藤や本田透が再三に渡り繰り返すように、「おたく」はむしろ犯罪からは遠い。というのも、「おたく」は虚構のキャラクターを愛するので、危険を冒してまで実在の人物に手を出すとは思えないからである。

他方で、「「おたく」は現実から逃避している」といった批判がある。少し長くなるが、「おたく」への批判がよく表れている室井佑月による文章を引用する。

> 小説と映画で大ヒットした『電車男』が、ドラマ版でも高視聴率をマークしつづけているとか。
>
> そして、雑誌などがこぞって『オタク』について取り上げはじめ、あたしはなんだか心配になってきた。
>
> だって、その取り上げ方、「これからはオタクの時代だ」みたいなものなんだもん。で、内容はオタクにインタビュー取材するだけ。「今、なにに填っているんですか」みたいな。
>
> ねえ、いいの。そんなにオタクをモテはやしちゃって。
>
> オタクでいいのは一部だよ。芸術家や研究者となって成功している人間だけでしょ。
>
> 女からしたら、最高とゴミ、それがオタクの世界である。その現実をきちんとオタクに伝えないと。それがマスコミの仕事だろうが。

信じられない。少子化問題を扱っていた同じ雑誌で、オタクをモテはやすなんて。

一部のオタクに親切に教えてやるけど、ドラマのオタクは君らの仲間じゃないからね。大勢の人々の鑑賞に堪えられるよう作られたオタクなんだから。

実生活ではちゃんとモテてるだろう俳優さんがオタク役をやっていて、メークさんもついてて、スタイリストさんもついてて。

そういった現実から目を逸らしちゃならない。

がしかし、ほんまもんのオタクは、あたしの意見なんぞ「フンッ」ってな感じなんだと思う。

そもそも一般論に耳を貸さず、我流で生きているのがオタクだからね。

だっから、アニメのTシャツを堂々と街で着るやつがいたりするんじゃん。

「気持ち悪い」とか、「恥ずかしい」とか、絶対に一度は親切にまわりからいってもらっているはずである。でも、聞かない。

マスコミの役目はそういった意固地なオタクをこんこんと説得するところにあったと思う。なに反対のことやってんだか。

どうする？　アニメTシャツを着ているオタクが、雑誌の記事を鵜呑みにして、

（俺に彼女がいないのは、たまたまなんだ）

とか生意気なこと考え出したら。

（運命の人が現れるのを、ひたすら待てばいい）

なんて余裕をぶっこきはじめたら。

アニメTシャツを脱がなきゃ、女が当たるわけないんだよ。変わろうという気持ちがなきゃ、一生童貞のままでいる率は高いね。

数年後、安易にオタクをモテはやした雑誌を出している出版社は、「話と違うじゃんか」と童貞たちに恨まれ、火をつけられることも覚悟しておくべきであろう。

話は変わるが、リメーク版『赤いシリーズ』、あっちの視聴率はほとほどだったんだって？

リメーク版は観ていないけど、子供の頃に観たやつは覚えている。たしか百恵ちゃんが骨肉腫になったり、記憶喪失になったりするの。今考えれば乱暴な設定だけれど、とても面白かった。

ってことは、『電車男』こそ、現代版『赤いシリーズ』だってことね。オタクが完璧な美女と？　ありえねー。［傍点は筆者による］（室井 2005）

「虚構のキャラクターを愛する人々」という本論文での定義からも明らかなように、この「現実から逃避している」という批判は基本的に当たっている。いくら虚構のキャラクターを愛するからといって、現実の人物をないがしろにするのはよくないことだろう[26]。しか

[26] 「おたく」は、電車の中など所構わず自己中心的に振る舞うというイメージがあるが、やはりそれはよくないと思う。

し、現実から逃避することそのものは、悪いことではない。本田透が主張するように、一人で大人しくアニメを見たりすることは、批判されるべきではないだろう。ましてや、「おたく」の人たちにとって現実が耐えがたいものであるなら、そこから逃避するのは自然な対処だと言える。激痛を伴う手術には麻酔を用いるように。それに、「はじめに」でも記したが、「おたく」ではない人も、「おたく」的な活動をしている。本田透のように、最初は異性とのコミュニケーションを避けていたわけではないのに、嫌な体験を繰り返すことによって避けざるを得なくなったのも本人が全て悪いのだろうか。前節で見たように、現代では愛情生活の自由化が進行し、彼のように嫌な体験をすることが増えていると推測される。

「おたく」は恋愛をするための努力をしていないと批判される。誰にでも恋愛は可能であり、そしてすべきであるという幻想が支配しているので、恋愛ができるようになるために絶えざる努力が要請される。今現在は恋愛をしている人には、それを維持すること、あるいは複数の恋愛をすることが説かれる。しかし誰でも、いつでも恋愛をしていることはあり得なく、本当は無理なことを追い求めているので、「がんばらないようにがんばる」といったような、矛盾するメッセージが送られることになるのではないだろうか[27]。

第 4 節　まとめ

本章で論じた、現代若者の愛情生活の様相をまとめよう。

近年注目を集めつつある「おたく」は、愛情生活と深い関わりがある。あまり強調されないが、異性に「モテない」ために「おたく」になるという「やむを得ず型」の「おたく」が相当数いると考えられる。本田透はその典型であり、自らの生活を語りながら、現代若者の愛情生活の現状を批判する。

彼が批判するような現状とは、恋愛が商品化され、そこには弱者が存在するというものである。その批判は「恋愛資本主義」という言葉に込められている。彼は恋愛できない人の存在を強く主張する。というのも、現代では、いつでも、誰にでも恋愛はでき、そしてすべきであるという幻想が根強く見られるからである。おそらくいつの時代にも恋愛できない人は存在しただろうが、今日ではその人たちの存在が覆い隠されているのである。

さらに現代では、結婚やセクシュアリティに恋愛が必須だとされる。「親密性パラダイム」が非常に強い影響力を誇っているのである。そうすると必然的に恋愛への関心が高まり、そこでうまくいかない人たちの苦しみが増す。恋愛感情という、個人の内面に行動の当否の基準が置かれるので、人間関係が不安定になりがちになり、「セクハラ」や「ストーカー」などの争いが多くなる。そこで重要となる恋愛とは、相手を深く魂より愛するようなものではなく、相手とコミュニケーションをとりたい欲求といったほどのものである。そして本田透が批判しているような恋愛の商品化が進む。そこでは相手を商品とみなす、「強い主体」同士の契約関係の様相を呈する。

---

[27] 巻末資料の図 6「恋愛が成功するための矛盾するメッセージ」を参照。

このように社会的な状況が変化しているにもかかわらず、「おたく」のように愛情生活に違和感を覚えている人たちは、本人が悪いとされる。というのも、努力すればうまくいく可能性を否定できないがゆえに、絶えざる努力が要請されるからである。

第2部　「強い主体」をめぐる考察

第1部では職業生活と愛情生活の二面から現代若者の様相を探った。「フリーター」や「ニート」の中には失業者と呼んでもよいような人たちが多数含まれており、実生活では「モテない」ために、虚構のキャラクターを愛する「おたく」になる人たちも多いのではないかと考えられた。職業生活と愛情生活の両面で自由化が進行しており、失業や「モテない」ことは本人の責任とされがちである。絶え間なく努力し、自己の利益を追求する「強い主体」の想定が広がっているのである。「フリーター」、「ニート」、「おたく」といった現象は、そうした「強い主体」が想定されているにもかかわらず、実際はそうではないことの現われである。

そこでこの第 2 部では「強い主体」という想定を疑い、そのようなものは存在しないことを論じる。第 3 章では「自己決定」をめぐる社会学的な議論を参照し、そこでは「強い主体」が想定されているために様々な困難が生じていることを考察する。それらの困難は、人間は「強い主体」ではなく、必然的に他者性が織り込まれていると考えれば解決する。第 4 章では、人間にはいかに他者性が入り込んでいるかを、精神分析理論で示す。主体には、ラカンの言うところの、小文字の他者と大文字の他者とが深く関わっているのである。そして最後に、現代の「強い主体」が想定されている状態は、大文字の他者が見えづらくなっていることの結果であると考えられるのではないかと結論づける。

第 3 章　自己決定をめぐる諸問題

第 1 章、第 2 章では、現代若者の様相を、職業生活と愛情生活の二側面から探った。両者において、いくらかの差異があるとはいえ、同じ問題構造が見られた。それはこのようなものである。技術発展や各種の自由化によって、若者のできることは過去と比べて増大している。「強い主体」の想定に耐えうる人たちはその恩恵を受けられるだろうが、多くの人はそうではない。例えば、インターネットが与えられたからといって、誰もが株取引で大金持ちになることはできないし、出会い系サイトを利用して恋愛できるわけではないのである。もっとも、豊富な資金と能力があれば株取引で儲けることができるし、抜群の容姿やその他の属性があれば出会い系サイトで恋愛することもできるだろうが。にもかかわらず、誰でも努力すれば成功することが可能であるかのように言われ、努力すべきだとされる。そしてその、可能性さえあれば努力して何でもできるという「強い主体」の想定に基づいて、成功しなかった人は努力をしなかったから、つまり自ら進んで成功しないようにしたのだから、自己責任であるということで、何の配慮もされないということになる。

このことは、医療や生殖といった領域でよく論じられる、自己決定というテーマに深く関わる。これらの領域は、新しい技術が最初に導入される場である。その新技術のおかげで可能性が広がり、それによって、自己決定に内在していた問題が噴出してくるのではないだろうか。

自己決定という概念はジョン・スチュアート・ミル（John Stuart Mill）の『自由論』に由来しているとされる。それを簡単に言えば、自分のことは自分で決めるということである。政治的には民族自決という主張につながった。自己決定は医療や生殖などの領域で多く語られ、「患者の自己決定権」や「女性の自己決定権」などが主張されている。医療ではどのような治療を受けるかを、医者ではなく患者本人が決めるべきだと言われ、生殖では、産むか産まないかは国家などが決めることではなく、女性自身が決めることであると言われる。どのような選択をすればよいかは通常、本人が一番よく知っているので、自己決定は単純によいことのように思える。

ところが自己決定はそれほど簡単なことではない。自己決定をめぐってはいくつかの問題がある。第一に、自己決定をするためには相応の知的、精神的能力がなければならないとされる。しかし、その規定を極めて厳密に受け止めるなら、多くの人が自己決定などできなくなる。第二に、自己決定をするに足る能力があるとしても、自己決定をするためにはその決定に関わる完全な情報を得なければならない。ここでも本当に完全な情報を追求するなら、自己決定を実現することは極めて困難になる。第三に、自己決定とは自分で決めることであるが、周囲の他者からの影響を完全に排して自分だけで決めることはできない。第四に、自己決定とは自分に関わることを決めることであるが、純粋に自分だけに関わることはほとんどない。第五に、自己決定はこれだけ危ういものであるにもかかわらず、必ずそれをしなければならないとされる。言い換えると、自己決定をしないという自己決

定は認められないのである。以下ではこれら五点について順次検討する。

第一の自己決定をするための能力について。理屈としてそうした能力が必要になることは理解できる。しかし、その能力を客観的に測定することはおそらく不可能であり、何らかの外的な属性に頼って線引きをするよりほかはない。典型的には年齢による線引きである。民法では、未成年者の自己決定を成人のそれと同じようには扱わない。法律の運用上仕方のないこととはいえ、成人になった途端に自己決定ができるようになるとされることには違和感が残る。成人といえども完全に自己決定ができる能力があるわけではなく、不本意な自己決定をしてしまうことがある[28]。また、自己決定をするためにはそのための能力が必要であるという規定を拡大解釈して、自己決定をする能力があれば人間で、なければ人間ではなく物とされる場合がある（この拡大解釈の背後には、すべての人間は自己決定をするという暗黙の前提が隠れている。このことは第五点の主題なので、そこでも触れる）。そして子供などは例外的に、もうすぐ人間になるものであるとして、パターナリズムの原理で保護される。それゆえ一般的には自己決定とパターナリズムは対置される。パターナリズムによる保護の対象は、極論すれば、人間ではなく物として扱われる。例えば、この理屈でいくと、胎児は自己決定をする能力がなく物として扱われるのに対し、妊娠している女性は自己決定をする能力があるので、自由に中絶する権利があるということになる。実際にこのような主張がなされ得るが、これはおかしいと感じられる。井上達夫はこうした、女性の自己決定を無条件に認める立場を次のように批判している。「胎児（あるいは、これこれの時期までの胎児）は人ではないから、その生命権は問題にならない、したがって、堕胎は余分な脂肪を手術で除去してもらうのと同様に、女性の自己決定の問題である、といった論法こそが、道徳的葛藤を隠蔽して、安心立命を得ようとする衝動の現われなのである」（江原編 1996: 38）。井上はそこで胎児の生命権でもって反論しているが、本論文ではそもそも自己と他者とをはっきりと区別して自己決定をすべきであるという原理に反対する。

第二の完全な情報について。例えば、医療の場ではインフォームド・コンセントということが主張されている。患者が自己の病気や治療に関する情報を得ることは重要であり、情報を得ることそのものを否定するつもりはないが、完全な情報を実現することは極めて困難であることを覚えておかなければならない。その人の病気の原因や治療法、副作用などについての漏れのない完全な情報は膨大な量になるだろう。完全な情報を入手できたとしても、素人の患者がそれを完全に理解するのは不可能に近い。仮に理解できたとしても、膨大な時間と労力がかかる。「強い主体」の仮定のもとではこうした実際上のコストは考慮されない。もちろん完全な情報を実現することは困難だからといって医者が何でも勝手に決めてよいわけではなく、患者に必要な情報をわかるように提供すべきではある。加えて病名の告知のことを考えると、情報を与えることによって患者に変化を与えてしまう可能

[28] そのため、例えば、民法に優先する特別法の規定で、一度結んだ契約を無条件で解除することができる、いわゆるクーリングオフが認められている。

性も考慮しなければならない。病気の告知とは別の例としては、保険に入るために遺伝子検査を受けて、遺伝性の病気になる可能性を見積もることが挙げられる。

第三の自分（だけ）で決めることについて。暴力によるようなあからさまな強制がなかったとしても、暗黙の圧力によって自己決定させられるという場合は十分考えられる。特に社会学ではこうした機制が明らかにされている。例えば、江原によると、安楽死に関して死の自己決定が叫ばれているが、ともすればそれは死の義務になってしまう（江原編 2002: 35）。家族や医療従事者にとってその人が生きていることによる負担が大きいなら、その人が死んでくれればいいという態度を見せるかもしれず、周囲の人に迷惑をかけるのが嫌だからといってその人は死を選ぶかもしれない。また、浅井美智子が言うように、子供を産むのだと表面上は自己決定していても、イエ意識や社会的評価が女性に対して子供を産むように強制している（江原編 1996: 268-74）と考えることにも根拠がある。もっともわかりやすい事例は性の自己決定に関してであり、貧困による売春はいうに及ばず、明白な貧困が見られない売春でも家父長制の影響であると言うことができ、アンドレア・ドゥオーキン（Andrea Dworkin）のようにすべての性交は強姦である（Dworkin 1987=1998）と主張することさえ原理的には可能である。とはいえこれは不毛な議論に見える。ともかく、周囲の人々の影響を全く受けることなしに自己決定をすることはまずできないのだから、自己決定とは別の原理を探すべきではないだろうか。

第四の自分に関わることを決めることについて。いくら自分に関わることを決定しようとしても、それを実行するためには他人の手を煩わせて迷惑をかけるかもしれない。例えば、足の不自由な人がどこかへ行きたいと自己決定したとしたら、誰かがその手伝いをする必要がある。これは極端な例だとしても、立岩が言うように、誰にも迷惑をかけない自己決定など存在しない（立岩 [1998a] 2000: 16-8）。性の商品化の議論で、売春、その中でも援助交際と呼ばれるようなものは、当事者の合意が成立しており、誰にも迷惑をかけていないので文句を言われる筋合いはないと主張されることがある。しかし、永田えり子が述べているように、性が商品化されることによって他の全ての女性が迷惑を被っている（永田 1997）とも立論することができる。

第五の自己決定をしなければならないということについて。自己決定の端緒だとされるミルの『自由論』の中に既にこのことが窺える箇所がある。彼によると、将来自己決定をすることができなくなるような奴隷契約は無効なのである（Mill 1859=1971: 205）。自己決定を擁護するためにはこうした規定を設けなければいけないが、そこから、すべてのことを自己決定をしなければならないという帰結が導かれる危険がある。

そうはいっても、物理的現実に逆らって自己決定をしなければならないということにはならない。例えば、地球に住むことを自己決定したなどとは言われない。月や火星に住むといった他の選択肢がないからである。社会的な制約も同様に考えることができる。逆に言うと、物理的現実や社会的な制約が変化し、可能な選択肢が複数示されると、自己決定をしなければならなくなる。生殖技術の発展により人工授精などが可能になると、ただ単

に何もせずに子供を産まないだけでも、あえて生殖技術を用いずに子供を産まないことを決定したとしなければならない。「強い主体」が想定されていると、生殖技術を用いることに伴う時間と金銭の負担や、健康への悪影響は顧慮されない。昔はどうしようもないものであった身体でさえ、現在では操作し得る対象となっている。そのため、一例を挙げると、ダイエットしなければならないといった圧力にさらされるのである。

自分に関わることは自分で決めるという自己決定は、それが実現できるとしたら、素晴らしいことである。しかし、以上五点にわたって検討してきたように、あらゆる面から完全な自己決定は不可能であると言わなければならない。にもかかわらず完全な自己決定が想定され、それに基づいて自己責任が個人に押し付けられたりする[29]。自己決定が自己責任を導かないということについては、いろいろな論証がありえるが[30]、ここではそもそも完全な自己決定など存在しないので、完全な自己決定から導き出される自己責任も同様に存在しないと主張する。

完全な自己決定をできる「強い主体」という想定が間違っているのである。さらに言うなら、自己決定と言われて通常思い浮かべるような、他者から完全に切り離された純粋な自己などは存在しない。決定を行う主体には、必然的に他者が刻み込まれているのである。そう考えると、上で述べた五点の問題は解決する。

第一に、自己決定をする能力を問わなくても済むようになる。先に上げた胎児の例だと、母親の自己決定権と胎児の生命権が対立すると考えるのではなく、母親と胎児との確固たる区別を排し、その渾然一体となった二人の決定だと考えればよい。もちろん、必ず胎児との一体感を持たなければならないというわけではない。強姦された結果の妊娠では、中絶が認められるべきであるということには、多くの人が同意するだろう。この自己決定をする能力と、第二の完全な情報を得ることをめぐる議論に関しては、自己決定とパターナリズムとが対置されていた。しかし、自己と他者との区別を絶対視しなければ、自己決定とパターナリズムは両立しうる[31]。その際、パターナリズムが濫用されてはいけないことは

---

[29] 責任の帰属については別に取り上げて検討する必要があるが、本論文では扱わず、今後の課題とする。以下でごく簡単な紹介だけをしておく。

ロバート・ノージック（Robert Nozick）に代表されるようなリバタリアニストは、自己決定、自己責任という原理を掲げ、所得の再分配などの社会保障は基本的に認めない。それとは対立的に、ジョン・ロールズ（John Rawls）は無知のヴェールを想定し、保険の原理で社会保障を肯定する。しかし両者の対立点は、才能などを自己決定の産物と見るか見ないかにあり、自己決定から自己責任が導かれる点では共通している。本論文では、主体には他者性が深く入り込んでおり、社会保障などによって他者の存在を尊重することは自らを尊重することにもつながると主張したい。

[30] 立岩は、福祉において、サービスを実際に供給する責任があるのはその内容を決定する利用者ではないこと、自己決定であろうとなかろうと、サービスを利用した結果についての責任は利用者が引き受けなければならないことなどを記述している（立岩 1998b）。瀧川裕英は、自己決定は自由の価値とも平等の価値ともつながっておらず、そこでの中心的価値は効率であるとし、自己責任の限界を示している（瀧川 2001）。

[31] 立岩は「まずは生存を保障しよう、そのための資源を与えよう、その存在を認めながら、

言うまでもない。第三の問題についても、周囲の影響を無視できないのなら、最初から周囲の他者を主体に織り込めばよいのである。第四点も同様である。第五点も問題でなくなる。

本章では、自己決定をめぐる様々な問題を列挙し、それらは完全な自己決定ができる「強い主体」を想定しているために生じることを示した。実際にはそのような「強い主体」は存在せず、主体には必然的に他者性が入り込んでいるのである。次章ではそのことを、精神分析理論から論じる。

その人にとってよいあり方についてはその人に考えてもらい決めてもらおう」という原則を提示し、自己決定とパターナリズムとが必ずしも対立しないことを主張する（立岩 2002）。立岩は別のところで、ジョン・ロック（John Locke）に由来する絶対的な所有権を疑い、選択的中絶などの議論をしながら、操作されない他者が存在することの快楽があるのではないかという結論に到達する（立岩 1997: 115）。この結論は、主体に他者性が刻み込まれているという本論文の主張と似ている。

第 4 章　精神分析理論における主体と他者

前章では社会学的見地から、自己決定の不可能性を論じた。そこでは完全な自己決定をできるような「強い主体」を想定することが間違っているのではないかと結論づけた。本章では、精神分析理論での主体性を吟味し、人間は他者から独立して一つのまとまりをもっている「強い主体」ではなく、小文字と大文字の二種類の他者性が織り込まれていることを確認する。小文字の他者と大文字の他者はラカンが導入した概念で、前者は主体の似姿であり、後者は超越的な他者である[32]。そして、その中でもとりわけ大文字の他者との関係が、現代では変化しつつあるのではないかとの仮説を提起する。

第 1 節　フロイト

第 1 項　統一的な「強い主体」の否定

精神分析の最大の特徴は、当時支配的であった、統一的な「強い主体」という概念を突き破り無意識を導入したことである。まずはそのことをたとえた、フロイトの有名な記述を見よう。

> 人類は時の流れの中で科学のために二度その素朴な自惚れに大きな侮辱を受けなければなりませんでした。最初は、宇宙の中心が地球ではなく、地球はほとんど想像することのできないほど大きな宇宙系のほんの一小部分にすぎないことを人類が知った時です。すでにアレキサンドリアの学問がこれに似たことを告げておりますが、われわれはコペルニクスの名を挙げなければなりません。二度目は、生物学の研究が人類の自称する創造における特権を無に帰し、人類は動物界から進化したものであり、その動物的本性の消しがたいことを教えた時です。この価値の逆転は、現代においてダーウィンやウォレスやその先人たちの影響のもとに、同時代の人々のきわめて激しい抵抗を受けながら成就されたものです。ところが、人間の誇大癖は、三度目の、そしてもっとも手痛い侮辱を今日の心理学的研究によってあたえられることになります。自我は自分自身の家の主人などでは決してありえないし、自分の心情生活の中で無意識に起っていることについても、依然としてごく乏しい情報しかあたえられていないということを、この心理学的研究は証明してみせようとしているのです。（Freud 1916-7=1971: 235-6）

自我が心的生活を完全に統御しているのではなく、人間は無意識によって運命づけられているのである。

---

[32] 小文字の他者と大文字の他者は、ラカンのシェーマ L に見られる。巻末資料の図 7「シェーマ L」を参照。大文字の他者は＜他者＞とも表記される。

人間が統一的な「強い主体」ではないことをフロイトに気づかせたのはヒステリー患者である。精神分析誕生の背景にはヒステリーや催眠といった現象への注目があった。これらの現象は統一的な「強い主体」という想定を強く揺るがす。というのも両者とも二つの意識状態（発作状態または催眠状態と通常状態）が劇的に観察されるからである。フロイトも精神分析治療をヒステリー患者から始めており、この二つの意識状態に注目している。

> 周知の古典的な症例において二重意識 double consciousness と呼ばれる、きわめて顕著な意識の分裂があらゆるヒステリーに、痕跡的な形においてではあっても存在しており、この解離の傾向、したがってわれわれが「類催眠状態」という名のもとに総括しようと考えている異常な意識状態の出現を招く傾向こそが、この神経症の根本現象なのである。（Freud 1895=1974: 17）

このヒステリー患者の二重意識は、人間が必ずしも統一的な「強い主体」ではないことを顕著に示している。

フロイトの理論において、「強い主体」の否定はヒステリーに限ったことではない。フロイトはヒステリーの研究から、夢の探求へと導かれるのである。そこでも人間の心的生活は夢の顕在内容と潜在内容とにわかれるのである。言い間違いや機知などにおいても、意識的な意図とは別の無意識の動機があることが見られる。こうして無意識についての理論が深められてゆく[33]。ヒステリー患者だけでなく、すべての人間の深い部分において、まとまった「強い主体」は見られないのである。

精神分析の技法は催眠から自由連想へと発展する。精神分析治療において、自由連想は基本原則である。分析主体に思いつくことをそのまま話すように要求するのである。しかし、フロイトの言うように、自由連想は本当に自由ではなく、無意識に規定されているのである（Freud 1924=1984: 138）。

ただ単に二つの意識状態があるだけではない。無意識には他者性が入り込んでいる。フロイトは 1897 年の手紙で、同一化の事実によって、心的人格の多重性を文字通りに取ることができるのではないかと考えていた（Masson 1985=2001: 248-9）。後期の理論ではそのことがもっとはっきりする。人格はいろいろな同一化からなっているのであり、同一化という機制によって、他者が主体に入り込むのである。フロイトによると、個々の同一化が意識自体を引き裂くことさえある（Freud 1923=1970: 278）。

フロイトは同一化を三種類に分類している。

> 第一に、同一化こそは対象への感情拘束の最も根源的な形態であること。第二に、同一化は退行的な経過をたどり、言うなれば、対象を自我の中に取り込むことを通して、対象へのリビード的拘束に対する代替物になるということ。そして、第三に、同一化

[33] 本来はもっと詳しく論じるべきであるが、今後の課題とする。

は、性欲動の対象ではない人物との間にであれ共通点が新たに知覚される度ごとに成立しうるということである。(Freud 1921=2006: 176-7)

この三種類の同一化には、ラカンの言うところの小文字の他者と大文字の他者が現れている。第二の同一化は、もともとは自分とは異なる対象を自我に取り入れるのであり、大文字の他者との同一化につながる。第三の同一化は、自分の似姿、つまり小文字の他者への同一化である。第一の同一化は、同一化そのものの基礎となっているものであり、ここではあまり詳しく触れない。

以下ではこの二種類の他者との関係についてまとめる。

第 2 項　小文字の他者[34]

やはりヒステリーから始めよう。集団ヒステリーでは、症状の伝播が見られる。これは前述の第三の同一化であり、ヒステリー性の同一化である。ヒステリーでは、小文字の他者への同一化が前景に出てくるのである。

フロイトによると、この同一化によって同情というものが生まれる（Freud 1921=2006: 176)。そして、教会や軍隊といった集団では、成員がこのように互いに同一化し合っている（Freud 1921=2006: 188)。

第 3 項　大文字の他者

こちらもヒステリーを取り上げて話を進めよう。当初ヒステリー患者の治療は、催眠を用いて二つの意識状態を統一することを目指して行われた。ここに催眠術者という他者が入り込む。フロイトは催眠について、後年、次のように述べている。「催眠術者が自我理想に取って代わっていることは疑いない」(Freud 1921=2006: 185)。この場合は、催眠術者が大文字の他者といっしょくたにされている。しかし、催眠は同一化とは異なる。同一化では対象が失われているが、催眠では対象が保持され、自我によって過大評価されている（Freud 1921=2006)。催眠術者と患者との関係は、集団における指導者と成員との関係に似ている。

ヒステリーでは、大文字の他者との同一化も見られる。フロイトによるとヒステリー患者のドーラ（ドラ）が父親の咳を真似るのは第二の自分とは異なる対象を自我に取り入れる同一化であり（Freud 1921=2006: 175)、大文字の他者との同一化である[35]。

大文字の他者との同一化は、超自我の由来になっている。超自我が形成されるのは両親の審級との同一化に成功した場合である（Freud 1933=1971: 439)。

---

[34] 本項の記述はあまりにも少なく、さらなる考察が求められる。

[35] 本来ならばもっと詳しく論じる必要があるが、それは今後の課題として、ここでは簡略な説明のみにとどめておく。

> 最初の性的時期に属する対象選択、つまり父と母に関係する対象選択は、正常な過程ではこのような同一視［同一化］となって終わり、そして一次的な同一視［同一化］をつよめるように思われる。（Freud 1923=1970: 278）

両親への対象選択は、通常認められないので、同一化でもって終わる。より詳しくいうなら、父への同一化と母への同一化である。男児にとっては、父への同一化が正常だとされるが、両方の同一化が存在するのである。そして超自我が発生する。

> エディプス・コンプレクスに支配される性的段階のもっとも一般的な結果として、自我の中の沈殿がおこると仮定することができよう。この沈殿とは、ある仕方で、たがいに結合した二つの同一視［同一化］の設立にほかならない。この自我変化は特殊な立場を保ち、自我理想あるいは超自我として、自我の他の内容に対立することになる。（Freud 1923=1970: 280）

超自我は、汝の隣人を愛せよといった、文化の基礎となっている。（Freud 1930=1969）ただし、この同一化は実際の一人の他者へと向けられたものではない。超自我は両親の超自我をもとにして作られる（Freud 1933=1971: 441）が、両親だけではなく、教育の効果などもある。大文字の他者は、両親や先生の向こうに見出され、それゆえ超越的な他者なのである。

第2節　ラカン

第1項　統一的な「強い主体」の否定

統一的な「強い主体」を否定し、主体には本来的に他者性が織り込まれているというフロイトのこの路線をさらに推し進めたのがラカンである。前節の冒頭に掲げたフロイトのたとえを引き継ぐ、ラカンによるたとえから入ろう。

> ある人達が気付いたように重要なのはコペルニクスの考えではなく、ケプラーのものです。というのは後者においては物体は同じ軌道を描かずに楕円を描くからです。そしてそのことから中心の機能ということが問題になりました。ケプラー理論で物体が落下する際に目指す楕円内の一点を焦点と呼びますが、それと対称的な点には何も在りません。（Lacan [1973-4]1975=1999: 43）

フロイトのたとえと比べると、一つの中心があるのではなく、二つの焦点があるという点が新しい。実際、フロイトには、自我を強くすればよいといった、自我心理学的に読める部分もある。しかしラカンはそれを拒否し、主体のまとまりのなさを強調している。

ラカンは初期の理論から統一的な自己のまとまりを否定している。人間は生まれながらにして統一された自己感を持っているわけではない。ラカンはしばしば「寸断された身体（corps morcelé）」という観念を持ち出す（Lacan [1949] 1966: 97）。それは夢でのばらばらな手足や、患者の幻想において見られる。

また、性欲動が、性器的に統合されているのではなく、欲動はすべからく部分欲動であることを強調している。

ラカンはそもそも主体という言葉を次のように用いている。

> ［シェーマ L の主体は］主体といっても分析的主体であって、全体としての主体ではありません。主体をその全体としてとらえるのだと言って我々をうるさがらせる人がいます。どうして主体が全体であるなどと言えるでしょう。そんなことは我々の与り知らぬところです。皆さんは全体である人などというものを見たことがありますか。それは一つの理想ではあるでしょう。でも私はそんなものは見たこともありません。私自身全体的なものではありません。皆さんだってそんなことはないでしょう。もし人々が全体であったら、それぞれの人がてんでばらばらに全体であるということになって、皆が一緒に、いわゆる組織を作ろうとするなどということはないでしょう。「S」とは全体としての主体ではなく、開けとしての主体です。例によって、主体は自分が何を言っているのか知りません。（Lacan [1954-5] 1978=1998: 118-9）

また別のところでは次のように述べている。

> 精神分析は「世界観 Weltanschauung」でも、宇宙の鍵を与えると主張する哲学でもありません。精神分析は歴史的には主体の概念を造り上げるという固有の目的にしたがってきました。精神分析は主体をシニフィアンに従属させることでこの主体の概念を新しい仕方で据えました。（Lacan [1964] 1973=2000: 102）

主体がシニフィアンに従属していることは、言表行為と言表内容との分裂にも対応している（Lacan [1964] 1973=2000: 182-6）。

第 2 項　小文字の他者

先ほど述べたように、人間にはそもそもまとまりはなく、いわば寸断されているのである。人間の乳児は神経系の発達が不十分であることがその理由である。栄養に依存していることもその理由かもしれない。そして、鏡などを通して視覚的に自己のまとまりを先取りするとされる。この人類学的な知見をもとにラカンは鏡像段階論を構想する。

人間には飢えや渇きといった生理的な欲求が備わっている。食べ物や水がなければ生きてはゆけないことは明らかである。乳児は自力でその欲求を満たすことはできない。周囲

の人がいわば偶然に欲求を満たしてくれるのを待つのみである。その際に主体（乳児）は、自分が、例えばミルクを欲しているなどとは感じていないのであろう。

そうして周囲に依存しながら欲求を満たしてもらうことを繰り返し、主体は自己のまとまりを獲得する。これが鏡像段階の意味するところである。この小文字の他者との同一化によって自己のまとまりが得られる。自己のまとまりにはそもそも想像的な他者が介在しているのである。こうして理想自我が形成される。そのおかげで、食欲と睡眠欲など、諸欲求の調整が可能になるのかもしれない。

シェーマ L においては「a」が小文字の他者を表していた。ラカンはその後、「a」に対象「a」という意味合いを持たせる。本来は大文字の他者との関係性を思わせるようなことでさえ、主体は小文字の他者として捉えることがしばしばある。対象 a の代表は眼差しであるが、それは飲み込めない対象のような物として現れる（Lacan [1964] 1973=2000: 364）。眼差しとは本来、大文字の他者との関係性を示していたからである。しかし、眼差しをもっぱら自己と切り離された対象として捉えることもできる。現代の我々は、通常、そのように捉えている。ラカンも言うように、これは科学的な認識方法である（Lacan [1964] 1973=2000: 357）。この方法は、疎外の後に続く分離の過程によるものである。ラカンが言うには、「対象「a」の機能によって主体は分離され、存在の揺れへの束縛、あるいは疎外の本質をなしている意味への束縛から解き放たれます」（Lacan [1964] 1973=2000: 348）。とはいえ、やはり、そこでも大文字の他者との関係性を拭い去ることはできないのである。

第 3 項　大文字の他者

運動神経が未発達なために無力な主体は欲求が生じてもその満足を幻覚することしかできない。そのままゆけば運動神経が発達した後もただ幻覚し続けかねない。しかし多くの場合は、養育者の導きに応じて、主体は欲求を満たすために大文字の他者へ向かって言語でもって要求するようになる。ラカンは要求を次のように説明している。「要求とは何でしょうか。これはある欲求が、＜他者＞に宛てられたシニフィアンによって伝えられたものです。」（Lacan [1957-8] 1998=2005: 124）。主体が生まれる以前から外側にあるような既成の言語を用いるので、欲求と要求との間には不可避的にずれが生じる。他者の言語を借りるよりほかない。ここで欲求を満たすことの不可能性がさらに増大する。

言語によってなされる要求は必然的に拒否の契機を含んでいる。何らかの要求に対して「No」と答える可能性が文法上あり得るのだから。ラカンはこれに関してマゾヒストとサディストの話を引き合いに出している。「「痛めつけてくれ」とマゾヒストはサディストに言います。サディストは答えます――「嫌だね。」」（Lacan [1957-8] 1998=2005: 124）。この話は、言表行為（欲求）の次元では見事に満足させられているにもかかわらず、そういった場合でさえも言表内容（要求）の次元では拒否に会っていることを示している。また、要求は欲求とは違って生理学的な基盤から離れているので、際限なく要求することができ、そしてしばしばそうなりがちである。ここにも拒否との出会いが予見される。

このように要求は決して完全に満たされることはない。とはいえ主体が生存を続けているなら要求が叶えられることもある。要求は叶えられたり叶えられなかったりする。その基準がわからないと主体はつらいであろう。そのため主体は別の段階に至る。ラカンによると、「叶えられても、叶えられなくても、要求は次の段階で消滅、無化し、すぐにべつのことへと投影されます。あるいは、贈与の象徴的連鎖という分節へ、あるいは、ナルシシズムと呼ばれる閉ざされた領域、決して消滅しえない領域へと投影されるのです。」(Lacan [1956-7] 1994=2006: 125)。

そもそもは欲求を満たす対象を要求していたのだが、その要求が叶えられたり叶えられなかったりするという経験を通して、要求を叶えたり叶えなかったりする大文字の他者を目指すようになる。欲求のレベルでは主体と外界との区別しかなかったが、要求の世界に足を踏み入れると、それを叶えたり叶えなかったりする大文字の他者が立ち上がるのである。ラカンによれば、「要求とは、その根底において愛の要求 demande d'amour――何でもないもの、いかなる特定の満足でもないものの要求であり、主体が要求に対する単なる応答によってもたらすものの要求――なのです。」(Lacan [1957-8] 1998=2006: 197)。ラカンの言う愛とは「ある一個の＜他者＞をすっかり我がものとするということ」(Lacan [1957-8] 1998=2005: 194) であり、主体はこの大文字の他者に同一化するのである。ラカンは言う。「主体はまさしく、要求を聞き入れかなえることのできる主体に同一化します。」(Lacan [1957-8] 1998=2006: 137)。鏡像段階での小文字の他者への同一化に対して、こちらは大文字の他者との同一化と言える。

こうした段階を経て主体は養育者や社会といった大文字の他者の視座に立ち、その欲望を引き継ぐのである。大文字の他者が望むものを欲望するようになり、ラカンの有名な命題が現れる。「本質的な欲望とは、＜他者＞の欲望の欲望、つまり欲望されたいという欲望 le désir d'être désiré なのです。」(Lacan [1957-8] 1998=2006: 34)。別の言い方をすると、「＜他者＞として欲望する」(Lacan [1960] 1966: 814) のである。ここに至ると当初の欲求の対象からは大きく隔たり、主体は象徴的に統御される。ラカンは欲望をこう説明する。「欲望とは何でしょうか。欲望は、もっぱら欲求の想像的な方向づけの領域に属しているすべてのものに対する、ある本質的なずれによって定義されます――要求がこの欲求を、別の秩序、象徴的な秩序に導入するわけですが、象徴的秩序は、ここにさまざまな混乱をもたらします。」(Lacan [1957-8] 1998=2005: 132)。つまり、欲望は部分的にあきらめるという条件のもとでのみ、満足させられることができるようになるということで、「部分的に疎外された欲望にならなくてはならない」(Lacan [1957-8] 1998=2006: 57) のである。

そして一旦象徴的な秩序が導入されると、その後は象徴的な法則、シニフィアンの法則によって欲望は水路づけられる。神経症の症状がしばしばだじゃれのようなもので作られるのはそのためである。

これまでにも何度か登場した、「疎外」に注目しよう。疎外は集合の図で示される[36] (Lacan

[36] 巻末資料の図 8「疎外 1」、図 9「疎外 2」を参照。

[1964] 1973=2000: 283)。主体のほうを取ろうとするとどちらもなくなってしまうので、他者を選び、主体と他者とが重なる無意味の部分がくり抜かれた他者が残ることになる。その直後に示されている、「金か命か」の図と照らし合わせるとわかりやすい。つまり、主体は、自分一人だけでは生きてゆけないので、他者と関わらざるを得ないのである。そしてその後、前述の分離という操作によってこの疎外を覆い隠すのである。

このような疎外された欲望が向かう先はシニフィアンの宝庫としての欲動であるとラカンは言う（Lacan [1960] 1966: 817)。大文字の他者からの要求に、主体の消失でもって応えようとする分離の過程を経て欲動が生じる。ラカンは次のように述べている「欲動とは、主体が消失するような要求から生じるものです。」（Lacan [1960] 1966: 817)。シニフィアンはシニフィエと必然的に結びついているのではなく、シニフィアンだけでばらばらにできるという性質から、欲動も本質的に部分欲動なのである。欲動は、一般的に想定されているように性器的に統合されているわけではない。

このように、主体はあらゆる段階においてまとまってはおらず、様々な形で他者が入り込んでいる。

第 3 節　大文字の他者との関係の変化

本章ではここまで、主体には小文字と大文字の二種類の他者が深く入り込んでいることを、精神分析理論から描写した。他者から完全に独立した「強い主体」など存在しないのであり、それは現代においても変わりはない。それでは第 1 章、第 2 章で取り出した、「強い主体」を想定するという現代社会の特徴は、本章での精神分析理論ではどのように記述できるのだろうか。本節ではこれまでの議論の総合を試みる。しかしそれはあくまでも一つの説明モデルであり、別様にも説明できるかもしれないことを断っておく。もっとも、そのような可能性は、こういったテーマを扱う際には避けられないものではある。

現代でも、人間は未熟な状態で生まれ、周囲の他者に依存しないと生きてゆけないことに変わりはない。言語を介して要求しなければならないことにも変わりはない。つまり、欲求や要求の水準では時代差はないだろう。やはり欲望の水準で何らかの変化があったのではないだろうか。つまり、大文字の他者との関係の変化である。

結論から言うと、現代では、大文字の他者が見えづらくなっているのではないだろうか。前節でも述べたように、大文字の他者は両親の向こう側に置かれる。そして主体とは異質なものとして感じられ、超自我の禁止の機能を果たす。この様子がうまく現れている一節を、フロイトの症例ハンスから取り出そう。

> ハンスは、たった一本の縄で場所を仕切ってあるなんて、縄の下をすぐにくぐり抜けられるのにと、とても不思議がった。私［ハンスの父親］は彼に、行儀のいい人間は縄の下をくぐらないといった。彼が、そんなこと、すぐできるよといったので、私は、そんなことをしたら見張りのひとが来て、連れていかれるぞと答えた（Freud

1909=1969: 198)。

大文字の他者は父親の向こう側にいる、見張りの人に体現されている。ここでは大文字の他者がわりあいはっきりと見えている。

現代では同じような状況の子供に対してこのように言って叱るだろうか。向こうにジュースの自動販売機があるよと言ってそちらへ誘導するほうが現代的ではないだろうか。さらに都市設計の見地からも、現代では、人に入って欲しくない場所を縄で示すより、角度をつけたり不快な音を出したりして、生理的にそこに入りたくなくなるような設計をするということがなされている。東はミシェル・フーコー（Michel Foucault）の言葉を借りて、前者の縄でくくるような権力を「規律訓練型権力」、後者の人間工学を活用し、表面上は何も禁止しない権力を「環境管理型権力」とまとめている（東・大澤 2003: 31-9)。そこでも挙げられているように、「環境管理型権力」の典型は、長く滞在したくなくなるような硬さに設計されたマクドナルドのイスである。

現代では、言うなれば「汝の欲求に忠実に行動せよ」という大文字の他者からの要求が強まりつつあるのである。それを引き継いで自らの欲望とするなら、「自分の欲求に忠実に行動するという欲望」になる。このように欲求と欲望とが近接することによって、大文字の他者が見えづらくなっているのである。

分離の過程で疎外が覆いつくされているとも言えるかもしれない。主体の根底的な存在など問わず、自己と対象とをはっきり区別する科学は飛躍的な発展を続けているのだから。

大文字の他者が見えづらくなることは別に悪いことではないかもしれない。しかし、大文字の他者との同一化が廃れると、社会の安定が崩れ、原始状態に近づく。フロイトも言うように、大多数の人にとって原始状態より文化がある状態のほうがよい（Freud 1930=1969: 472)。社会構成員同士の小文字の他者との同一化による同情があるとはいえ、それだけでは心許ない。というよりも、小文字の他者との同一化は、大文字の他者との同一化を前提にしている。

この大文字の他者との関係の変化をフロイトはすでに予期していた。先ほどもまとめたように、フロイトによると、大文字の他者に開かれた指導者との同一化と、成員同士の小文字の他者への同一化の二種類の同一化が働いていた。フロイトはそのうちの前者が廃れるという危惧を表明している。

> この［「大衆の心理的貧困」とでも呼ぶべき状態が生まれる］危険が一番強く感ぜられるのは、社会の結びつきがもっぱら構成員相互間の同一視［同一化］によって生まれ、指導者のほうは、大衆が形成される場合にはそれが当然持たなければならないだけの重要性を持つにいたらない場合である。現在のアメリカの文化状態は、あるいは起こるかもしれぬ上述のような文化の害を研究するためにはよい機会であろう。（Freud 1930=1969: 473）

それでは、第 1 章と第 2 章で扱った、現代若者の職業生活と愛情生活とで、いかに大文字の他者が見えづらくなっているか、そしてそのために原始的な弱肉強食の世界に近づきつつあるかを示そう。

若者の職業についての記述で、「好きなことをしろ」という親がよく登場する。そう言われても自分の好きなことなどなかなかわからない。その好きなことは、せいぜい楽な仕事、給料の高い仕事になりがちである。欲求のレベルに切り詰められるのである。仮に欲求とは別の何らかの欲望を引き継いだとしても、例えばそれが芸能人になることだったりすると、好きなことをしろと言った親は反対するかもしれない。親が反対しなかったとしても、その職業に就ける可能性は少ない。こうして、主体とは根本的に異なっており、禁止をしたりする大文字の他者が、「好きなことをしろ」といった言説によって隠蔽されているのである。

昔の制度と比べるとよりはっきりするだろう。高校からの推薦を受けて就職に臨む一人一社制では、その高校の向こうに大文字の他者を見ることになる。そうして、例えば後輩に迷惑がかかるので失礼なことはできないなどと感じる。その大文字の他者からの要求も、まじめに出席して勉強しろというようにわかりやすい。また、結婚をして子供を育てるという規範でも、その家庭の向こう側に大文字の他者が見える。日本型雇用の会社や労働組合も同様である。もちろん、いいことばかりではなく、大文字の他者が見えやすいために、会社人間になったりすることもある。

現代においては、大文字の他者が見えづらくなり、原始状態に近くなっている。強い者が好き放題するのである。職業生活の場合、強者は企業であることがほとんどなので、企業の都合のよいことになる。一部の非常に有能な人も好待遇を受ける。

他方、愛情生活には、そもそも他者性が深く入り込んでいるはずである。フロイトは、恋着を対象が自我理想の位置を占めることであると記述している（Freud 1921=2006）。しかし大文字の他者が見えづらくなった現代では、対象が自我理想の位置を占めることも難しくなってきているのではないだろうか。森永が描くような契約モデルで表される現代の恋愛の状態[37]は、はっきりとした「強い主体」が想定されており、他者は利用する対象でしかない。それゆえ、他者をより利用するために、いかに「モテる」かが重要になるのである。大文字の他者が見えづらい状況では、二者間の恋愛関係は闘争的になる。ラカンは二者間の想像的な関係を、双数と決闘との二つの意味がある”duel”という言葉で表現している（Lacan [1955-6] 1981: 23=1987: 22）。

愛情生活における大文字の他者は、お見合いを思い浮かべるとわかりやすい。お見合いの場合は、紹介者の向こうに大文字の他者が想定される。結婚式の儀式もわかりやすい。聖職者や神を通して、その向こうに想定される大文字の他者に愛を誓うのである。

現代の基準では大文字の他者が見えづらくなっていることが窺えるもう一つの例を挙げ

[37] 本論文の p.25 にある森永からの引用を参照。

よう。

精神分析では、分析主体が分析家に好意を持つことがよくある。それは転移性恋愛と呼ばれるのだが、分析家は安易にそれに応えてはいけないとフロイトはしている（Freud 1915=1983）。その愛情は大文字の他者へと向けられていると考えられるのである。もっともフロイトは、転移性恋愛と、いわゆる正常の恋愛との区別がつけられないと考えている（Freud 1915=1983: 124）。ところが第 2 章でも述べたように、現在支配的な「親密性パラダイム」では、相手が好意を寄せているのなら何をしてもよいということになる。大文字の他者など存在しないとされているのである。

「おたく」のキャラクターへの愛着は、転移性恋愛に似ていないだろうか。その人（キャラクター）自身は、言ってみればどうでもよく、重点は「おたく」の特徴として先に述べた、強制的な関係にある。大文字の他者が隠蔽されている現代の恋愛状況に違和感を覚えている「おたく」は、その「おたく」的な愛情表現において、大文字の他者を希求しているのではないだろうか。

催眠についても、大文字の他者が見えづらくなっているという現代の特徴が浮かび上がる。「親密性パラダイム」の考え方を応用すれば、現代では、あらゆる行為に相手の同意が必要とされる。しかし、その同意が催眠によるものであっても、ともかく明示的な相手の同意があればよしとされる。しかしフロイトは催眠を拒否した。催眠は大文字の他者を覆い隠すからである。ラカンは「催眠を、そこで主体が自らを印づけている理想的シニフィアンと対象「a」との混淆として定義するフロイトの方法、これは、かつて提出されたうちでもっとも信頼できる構造論的定義でありましょう」（Lacan [1964] 1973=2000: 367）としている。ここでの理想的シニフィアンとは自我理想（I）とほぼ同義で、そこでは大文字の他者が直接関係している。ラカンによると「精神分析の操作の基本的な原動力は「I」と「a」との間の隔たりを保つことにある」（Lacan [1964] 1973=2000: 368）のであり、催眠によって大文字の他者を覆い隠すことは、精神分析ではないのである。

おわりに

現代若者の様相を描き、そこでの問題点を論じるという、本論文の目標はひとまず達成されただろう。「フリーター」、「ニート」、「おたく」は、絶えず努力をして自らの利益にかなうような決定をするような「強い主体」の想定からはみ出す現象であると位置づけられた。なぜなら、そのような「強い主体」と実際の人間との間には乖離があるからである。精神分析理論は、主体に他者性を導入して、その乖離を埋めようと試みているのである。

ここでは以上の議論を進める際に湧き起こった疑問を挙げ、今後の課題として整理する。

まず、「現代若者」と銘打ちながら、主に男性のことしか論じなかったことが悔やまれる。愛情生活はもちろん、職業生活においてもジェンダーの問題が随所に現れた。ジェンダーの問題については、フェミニズムの議論などが多数蓄積されており、今後参照すべき仕事は山ほどある。

次に、「自己決定」を論じるためには、思想史を踏まえなければならないと痛感した。本論文での第 3 章の記述ではあまりにも不足している。いかにして「自己決定」という概念が誕生したかも含めて、大きな視野での考察が求められる。

精神分析理論の検討も、本論文では基本的な理論の紹介に終始した感が否めない。同一化を扱いながらも、ラカンの「同一化」のセミネールには全く手をつけられなかったことが残念である。精神分析理論を現代社会に応用する試みも、すでに多くの論者によってなされているにもかかわらず、本論文ではほとんど参照することができなかった。これも今後の課題としたい。

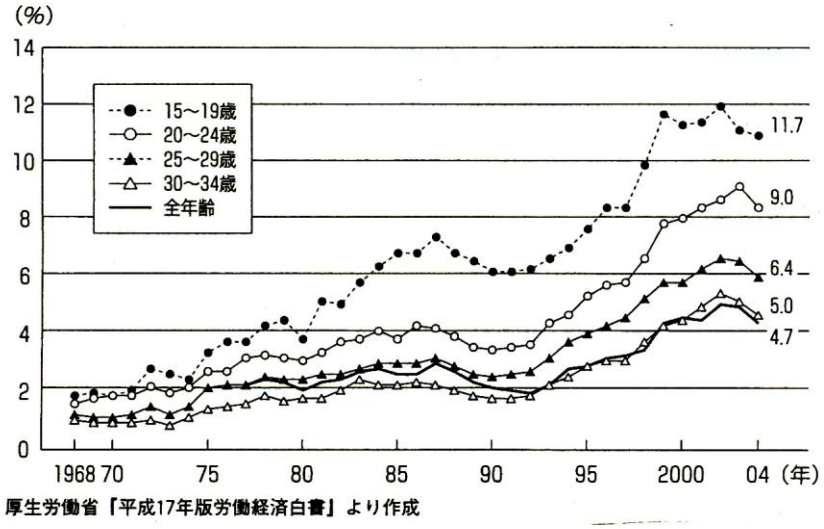
資料

					A：フリーター 内閣府	B：フリーター 厚生労働省	C：無業者＝ニート 厚生労働省	D：無業者＝ニート 内閣府	E：若年無業者 厚生労働省
労働力	就業者	雇用者	正規雇用						
			非正規	学生アルバイト・既婚女性パート					
				その他 派遣・契約等	○				
				その他 パート・アルバイト	○	○			
		自営など							
	失業者		パート・アルバイトを希望		○	○			
			その他		○				
非労働力	通学（予備校含む）		通学している学生						
			現在、通学していない学生						○
	家事従事		未婚者（家事手伝い）					○	
		既婚者	家事をしている						
			現在、家事をしていない						○
	その他		就業希望（求職活動はしていない）		○	○	○	○	○
			就業希望せず				○	○	○
					417万人	213万人	52万人	84.7万人	64万人
					2002年	2004年	2003年	2002年	2004年

注：A：フリーター（内閣府『平成15年版国民生活白書』による）
B：フリーター（厚生労働省『平成17年版労働経済白書』による）
C：無業者＝ニート（厚生労働省『平成16年版労働経済白書』による）
D：無業者＝ニート（内閣府「若年無業者に関する調査（中間報告）」による）
E：若年無業者（厚生労働省『平成17年版労働経済白書』による）
上記をもとに作成

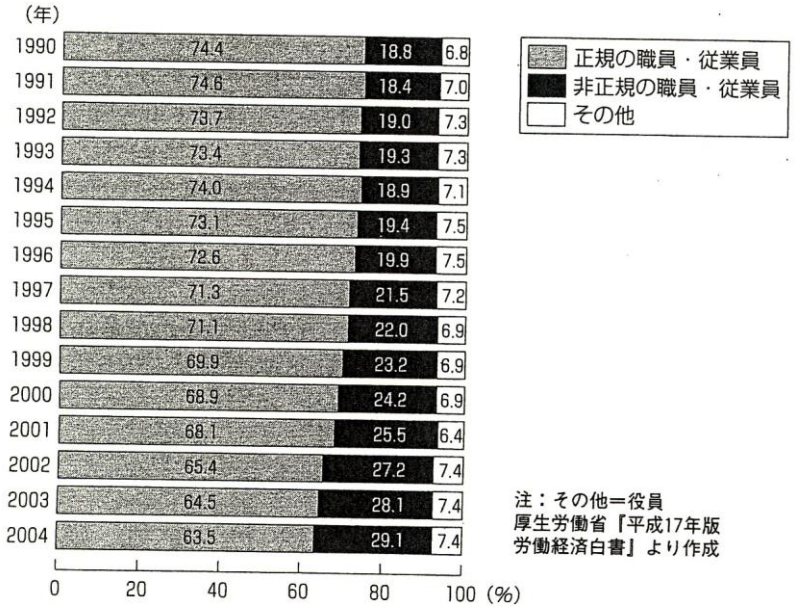
出典：（佐藤・平塚編 2005: 58）

図１　「フリーター」、「ニート」概念の錯綜



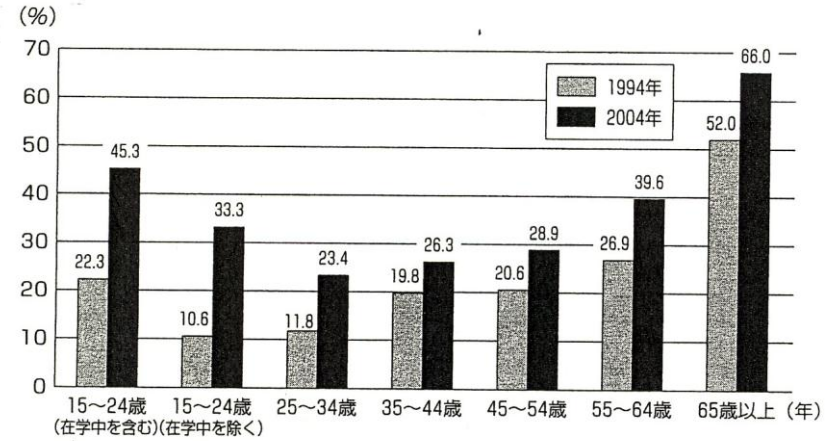
出典：(佐藤・平塚編 2005: 82)

図 2　年齢別完全失業率の推移



出典：(佐藤・平塚編 2005: 81)

図 3　雇用者に占める非正規雇用者割合の推移



出典：(佐藤・平塚編 2005: 82)

図 4　年齢別非正規雇用者の割合

出典：(『ジェイ・ジェイ』2006 年 11 月号: 370)

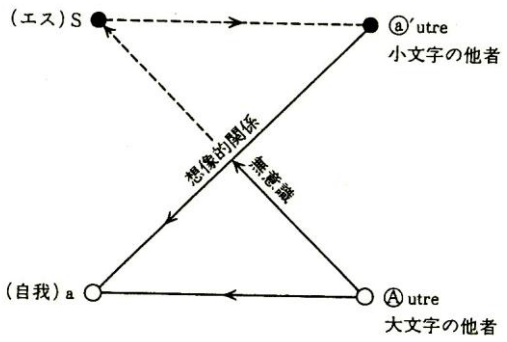
図 5　「愛され」特集

愛されるためのアイラインが示されている。そこでは「モテ」との微妙な差異が強調されているが、基本的に同じことを表しているようである。

出典：(『ジェイ・ジェイ』2006 年 11 月号: 396)

図 6　恋愛が成功するための矛盾するメッセージ

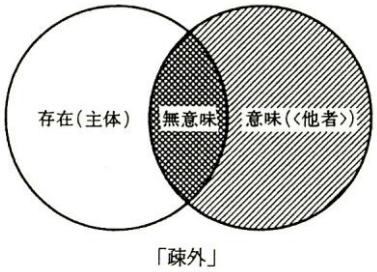
合コンでのよい振る舞いと悪い振る舞いが示されている。しかし、どういった基準で良し悪しを決めているのかがわかりづらい。特に右から二列目に注目すると、字が小さくて見えづらくなっているが、男性が「できればサラダとか取り分けてほしいけど、他のコを押し退けてまではやりすぎだな」と言っている。ここには矛盾するメッセージが含まれている。



出典：(Lacan [1954-5] 1978=1998: 118)

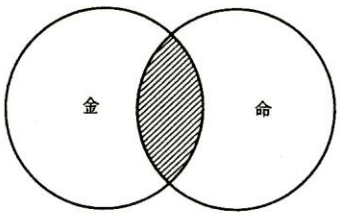
図 7　シェーマ L

シェーマ L には、想像的と象徴的の二つの軸がある。前者は、左上の S（エス、主体という意味もある）から発し、右上の a'（小文字の他者）との鏡像的な関係から左下の a（自我）に至る経路であり、理想自我と関係する。後者は、S にはシニフィアンの場所をなす A（大文字の他者）が先行していることを示しており、自我理想と関係する。



出典：(Lacan [1964] 1973=2000: 283)

図 8　疎外 1



出典：(Lacan [1964] 1973=2000: 284)

図 9　疎外 2

図 8 で、存在（主体）のほうを取ろうとするとどちらもなくなってしまうので、意味（他者）のほうを選び、そこから無意味の部分がくり抜かれて残る。これは図 9 の「金か命か」という図式と同じ構造である。そこで金を選ぶとどちらも失うので、金が奪われた命が残ることになる。

文献

赤川学，1999，『セクシュアリティの歴史社会学』勁草書房.
東浩紀，2001，『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』講談社.
――――編，2003，『網状言論 F 改――ポストモダン・オタク・セクシュアリティ』青土社.
――――・大澤真幸，2003，『自由を考える――9・11 以降の現代思想』日本放送出版協会.
Dworkin, A., 1987, *Intercourse*, New York: Free Press.（＝1998，寺沢みづほ訳，『インターコース――性的行為の政治学』青土社.）
江原由美子，2002，『自己決定権とジェンダー』岩波書店.
――――編，1996，『生殖技術とジェンダー』勁草書房.
Freud, S., 1895, "Studien Über Hysterie," Reprinted in: 1952, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 1 Werke aus den Jahren 1892-1899*, London: Imago Publishing, 75-312.（＝1974，懸田克躬訳「ヒステリー研究」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　7　ヒステリー研究他』，人文書院，5-229.）
――――, 1905, "Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie," Reprinted in: 1942, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 5 Werke aus den Jahren 1904-1905*, London: Imago Publishing, 27-131.（＝1966，懸田克躬・吉村博次訳「性欲論三篇」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　5　性欲論・症例研究』，人文書院，7-94.）
――――, 1909, "Analyse der Phobie eines fünfjahrigen Knaben," Reprinted in: 1941, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 7 Werke aus den Jahren 1906-1909*, London: Imago Publishing, 241-377.（＝1966，高橋義孝・野田倬訳「ある五歳男児の恐怖症分析」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　5　性欲論・症例研究』，人文書院，173-275.）
――――, 1915, "Bemerkungen über die Übertragungsliebe," Reprinted in: 1946, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 10 Werke aus den Jahren 1913-1917*, London: Imago Publishing, 305-21.（＝1983，小此木啓吾訳「転移性恋愛について」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　9　技法・症例篇』，人文書院，115-26.）
――――, 1916-7, "Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse," Reprinted in: 1940, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 11 Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse*, London: Imago Publishing, 1-482.（＝1971，懸田克躬・高橋義孝訳「精神分析入門（正）」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　1　精神分析入門――（正・続）』，人文書院，7-383.）
――――, 1921, "Massenpsychologie und Ich-Analyse," Reprinted in: 1940, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 13 Jenseits des Lustprinzips/Massenpsychologie und Ich-Analysye/Das Ich und das Es*, London: Imago Publishing, 71-161.（＝2006，藤野寛訳「集団心理学と自我分析」新宮一成ほか編『フロイト全集　17　不気味なも

の・快原理の彼岸・集団心理学――1919-22 年』，岩波書店，127-223.）

――――，1923, “Das Ich und das ES,” Reprinted in: 1940, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 13 Jenseits des Lustprinzips/Massenpsychologie und Ich-Analysye/Das Ich und das Es*, London: Imago Publishing, 235-89.（＝1970，小此木啓吾訳「自我とエス」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　6　自我論・不安本能論』，人文書院，263-99.）

――――，1924, “Kurzer Abriß der Psychoanalyse,” Reprinted in: 1940, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 13 Jenseits des Lustprinzips/Massenpsychologie und Ich-Analysye/Das Ich und das Es*, London: Imago Publishing, 403-27.（＝1984，吾郷晋浩訳「精神分析要約」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　11　文学・思想篇Ⅱ』，人文書院，134-148.）

――――，1930, “Das Unbehagen in der Kultur,” Reprinted in: 1948, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 14 Werke aus den Jahren 1925-1931*, London: Imago Publishing, 419-506.（＝1969，浜川祥枝訳「文化への不満」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　3　文化・芸術論』，人文書院，431-496.）

――――，1933, “Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse,” Reprinted in: 1940, *Gesammelte Werke: chronologisch geordnet 15 Neue Folge der Vorlesungen zur Einfuhrung in die Psychoanalyse*, London: Imago Publishing, 1-197.（＝1971，懸田克躬・高橋義孝訳「精神分析入門（続）」井村恒郎ほか編『フロイト著作集　1　精神分析入門――（正・続）』，人文書院，385-536.）

玄田有史・曲沼美恵，2004，『ニート――フリーターでもなく失業者でもなく ： not in education, employment, or training』幻冬舎.

本田透，2005a，『電波男』三才ブックス.

――――，2005b，『電波大戦――ぼくたちの“護身”入門』太田出版.

――――，2005c，『萌える男』筑摩書房.

本田由紀，2005，『若者と仕事――「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会.

――――・内藤朝雄・後藤和智，2006，『「ニート」って言うな!』光文社.

井上俊，1973，『死にがいの喪失』筑摩書房.

石川弘義ほか編，1991，『大衆文化事典』弘文堂.

金子勝，1999，『市場』岩波書店.

国立社会保障・人口問題研究所，2006，「第 13 回出生動向基本調査――結婚と出産に関する基本調査」（http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou13/doukou13.pdf, 2007.1.19）.

小杉礼子，2003，『フリーターという生き方』勁草書房.

――――編，2002，『自由の代償/フリーター――現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構.

――――編，2005，『フリーターとニート』勁草書房.

小谷野敦，1999,『もてない男――恋愛論を超えて』筑摩書房.
――――，2005,『帰ってきたもてない男――女性嫌悪を超えて』筑摩書房.
――――編, 2003,『恋愛論アンソロジー――ソクラテスから井上章一まで』中央公論新社.
熊沢誠，2006,『若者が働くとき――「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』.
Lacan, J., 1949, "Le stade du miroir comme formateur de la fonction du je: telle qu'elle nous est révélée dans l'expérience psychanaltytique," Reprinted in: 1966, *Écrits*, Paris: Seuil, 93-100.
――――, [1954-5] 1978, *Le séminaire livre 2: le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*, Paris: Seuil.（＝1998，小出浩之ほか訳,『フロイト理論と精神分析技法における自我　上・下』岩波書店.）
――――, [1956-7] 1994, *Le séminaire livre 4: la relation d'objet et les structures freudiennes*, Paris: Seuil.（＝2005-6，佐々木孝次・原和之・川崎惣一訳,『無意識の形成物　上・下』岩波書店.）
――――, [1957-8] 1998, *Le séminaire livre 5: les formations de l'inconscient*, Paris: Seuil.（＝2006，小出浩之・鈴木國文・菅原誠一訳,『対象関係　上・下』岩波書店.）
――――, 1960, "Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien," Reprinted in: 1966, *Écrits*, Paris: Seuil, 793-827.
――――, [1964] 1973, *Le séminaire livre 11: les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, Paris: Seuil.（＝2000，小出浩之ほか訳,『精神分析の四基本概念』岩波書店.）
――――, [1973-4] 1975, *Le séminaire livre 20: encore*, Paris: Seuil. (=1999, Fink, B. trans., *On feminine sexuality: the limits of love and knowledge*, New York: W.W. Norton.)
Masson, J.M., 1985, *The complete letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess: 1887-1904*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press.（＝2001, 河田晃訳,『フロイト フリースへの手紙――1887-1904』誠信書房.）
Mill, J.S, 1859, *On Liberty*, London: John W. Parker.（＝1971，塩尻公明・木村健康訳『自由論』岩波書店.）
宮台真司・森川嘉一郎，2006,「モバイル社会における個人と全体――オタクはアキバを創ったのか」『Mobile Society Review 未来心理』NTT ドコモモバイル社会研究所, 8:50-7.
宮原浩二郎，1998,『ことばの臨床社会学』ナカニシヤ出版.
水野尚，2006,『恋愛の誕生 ：12 世紀フランス文学散歩』京都大学学術出版会.
森永卓郎，2003,『「B」で生きる経済学』中央公論新社.
室井佑月，2005,「オタク諸君!!「電車男」見て勘違いするなよ～」『東京スポーツ新聞』2005.8.2).
永田えり子，1997,『道徳派フェミニスト宣言』勁草書房.

内閣府，2003,『デフレと生活――若年フリーターの現在(いま)』ぎょうせい.
中森明夫，1983,「『おたく』の研究②――『おたく』も人並みに恋をする？」(http://www.burikko.net/people/otaku02.html, 2007.1.19).
新村出編，1998,『広辞苑』岩波書店.
岡田斗司夫，1996,『オタク学入門』太田出版.
大塚英志，2004,『「おたく」の精神史――一九八〇年代論』講談社.
斎藤環，2000,『戦闘美少女の精神分析』太田出版.
――――，2006,『家族の痕跡――いちばん最後に残るもの』筑摩書房.
ササキバラ・ゴウ，2004,『「美少女」の現代史――「萌え」とキャラクター』講談社.
佐藤洋作・平塚眞樹編，2005,『ニート・フリーターと学力』明石書店.
橘木俊詔，2004,『脱フリーター社会――大人たちにできること』東洋経済新報社.
瀧川裕英,「「自己決定」と「自己責任」の間――法哲学的考察」『法学セミナー』46(9): 32-5.
立岩真也，1997,『私的所有論』勁草書房.
――――，1998a,「空虚な～堅い～緩い・自己決定」『現代思想』26(7): 57-75.（再録 : 2000,『弱くある自由へ――自己決定・介護・生死の技術』青土社，13-49.）
――――，1998b,「自己決定→自己責任，という誤り――むしろ決定を可能にし，支え，補うこと」『福祉展望』23: 18-25.
――――，2002,「パターナリズムについて――覚え書き」『法社会学』56: 166-80.
――――，2005,「ニートを生み出す社会構造は」『Fonte』168: 7.（再録 : 2006,『希望について』青土社，162-70.）
上野千鶴子，1998,『発情装置――エロスのシナリオ』筑摩書房.
山田昌弘，1994,『近代家族のゆくえ――家族と愛情のパラドックス』新曜社.
柳父章，1982,『翻訳語成立事情』岩波書店.